ISSN 1347-7374

先進医薬年報

No. 24

2023年8月

公益財団法人　先進医薬研究振興財団

目　　次

はじめに……林　　義　治…… 1

寄　　稿

理事退任にあたって－新型コロナの流行と最後の３年間－……島　本　和　明…… 2
「片仮名言葉の氾濫」……尾　﨑　由基男…… 4
新型コロナパンデミックとウクライナ侵攻……武　田　雅　俊…… 6

2022 年度 事業報告並びに決算報告…… 8

2022 年度 選考委員会報告

精神薬療分野の助成選考経過……上　野　修　一…… 14
精神薬療分野の助成金受領者…… 15
血液医学分野の助成選考経過……浅　田　祐士郎…… 20
血液医学分野の助成金受領者…… 21
循環医学分野の助成選考経過……安　斉　俊　久…… 26
循環医学分野の助成金受領者…… 27
先進研究助成の助成選考経過……安　斉　俊　久…… 32
先進研究助成の助成金受領者…… 33

第６回 先進医薬研究報告会…… 34

助成研究の成果

発表論文…… 38

財団トピックス

2022年度（第6回）若手研究者継続助成 選考経過報告…… 46
記念品贈呈式…… 47

海外留学だより…… 51

財団概要…… 66
賛助会員…… 74
賛助会員ご入会のお願い…… 75

はじめに

公益財団法人 先進医薬研究振興財団
理事長　林　義治

当財団は医学及び薬学に関する先進的な研究の振興を図り、もって国民の医療と保健に貢献することを目的に、精神薬療分野、血液医学分野、循環医学分野の 3 分野の研究助成を主体とした活動を行っています。

2022 年度の活動を振り返りますと、助成事業では「精神薬療分野」4,100 万円、「血液医学分野」3,800 万円、「循環医学分野」4,100 万円を一般研究助成、若手研究者助成および海外留学助成として交付いたしました。加えて、年ごとに分野持ち回りとしている先進研究助成については、循環医学分野を対象に 1,000 万円を交付いたしました。また、世界的に猛威を振るった COVID-19 の研究振興を図る目的で、2021 年度より特別枠として開始した COVID-19 研究助成について、3 分野合計で 700 万円を交付いたしました。その結果、2022 年度の助成は 108 件、総額 1 億 3,700 万円となり、1968 年に前身財団が発足してからの助成総数は 4,000 件を超えました。また、研究報告の場として、先進研究助成金受領者が研究成果発表を行う「第 6 回 先進医薬研究報告会」を昨年 12 月 9 日にオンラインで開催し、多くの方に聴講いただきました。さらに、刊行物として、「先進医薬年報 No.23」と「2022 年度 研究成果報告集」を発刊いたしました。

2023 度における当財団の助成事業は、特別枠として設けていた COVID-19 関連一般研究助成が一定の役割を終えたものと考え、3 分野における一般研究助成、若手研究者助成および海外留学助成、ならびに血液医学分野を対象とした先進研究助成での公募を行いました。

3 年に渡るコロナ禍において、人類は大きな損失と制約を受けましたが、一方で技術革新が進んだ点も多々ありました。社会全般的にはテレコミュニケーションや生成 AI といった非接触での業務効率化技術が進展しましたし、医薬品では mRNA ワクチンが初めて実用化されました。後者はウイルス同定からわずか 1 年のうちに製品化され、話題となりましたが、長年の地道な基礎研究の積み重ねと果敢な臨床研究があったがためであり、今般の世界的な非常事態で一気に開花した技術です。当財団としても、引き続き我が国の基礎および臨床の研究支援活動を通して、国民の医療と保健に貢献して参ります。

最後になりましたが、当財団の事業計画の立案と実行に当たりましては、当財団の評議員、役員、選考委員、ならびに出捐者であります田辺三菱製薬株式会社、そして賛助会員の皆様方のご理解とご支援をいただいております。改めて厚く御礼を申し上げますと共に、引き続きご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

寄　稿

理事退任にあたって
ー新型コロナの流行と最後の３年間ー

公益財団法人 先進医薬研究振興財団　名誉理事　**島本　和明**
（日本医療大学 総長、札幌医科大学 名誉教授）

先進医薬研究振興財団には、選考委員、評議員、理事と長年に渡りお世話になった。研究費の獲得が困難になりつつある中で、研究、特に基礎研究の担い手不足が指摘されており、本財団が果たしている役割は極めて大きい。特に若手研究者への研究助成と留学助成は本邦の医学研究の発展に少なからず貢献している。このような財団の活動に少しでも関わることが出来たことを幸甚に思う。

しかし理事としての最後の３年間は、まさに 2020 年に世界流行した新型コロナ漬けの３年であった。学会、会議、講演会等がことごとく延期になり、続いて遠隔で行うのが主流になり、その後ハイブリットへと変化していった。本財団の理事会、研究発表会も同じであった。本財団理事会の楽しみの一つは、東京開催時に開東閣に行けることで、三菱財閥の名残を留める、歴史ある建築と庭、そして料理も通常のホテル開催とは異なった趣きであった。新型コロナの流行で開東閣での会議がこの３年無かったことは心残りである。

３年前の 2020 年３月に北海道独自の緊急事態宣言、４月に日本全国への緊急事態宣言があり、その後は８波に渡って感染拡大と縮小を繰り返した。流行初期、私達のように大学で講義を行う者にとって、授業形態が大きな問題になった。感染拡大防止のため、大学は学生の登校を禁止し、授業をいったん中止とした。その間に遠隔講義の準備を急ピッチで行った。まずは大学のインターネット環境の強化、学生のインターネット環境やパソコンの有無等の状況確認、さらには学生へのパソコンの貸し出し、並行して teams で講義を行う準備を教職員が整えた。まさか全学生に対して全教員が遠隔で講義を行うなど誰も想定しておらず、まさしく想定外の事態であった。GW を返上して大変な負担とともに準備を行い、GW 明けから全学生に対して teams での講義がスタートした。走りながら考えるような状態で、その後も出席確認の方法、チャットやメールによる質疑応答、双方向対話、学生の集中力を持続させるため 90 分講義中に小休憩を入れること（そのために講義用のパワーポイントの再構成すること）等、多くの課題に直面してはその都度対応に迫られ、教職員で話し合い、各自工夫し、より良い方法を探った。すべて今まで行ったことがない対応であったが、何とか軌道に乗せて無事に遠隔講義を乗り切った。

遠隔講義だが、メリットとしては自宅にいても講義が行えることであったが、私の勤め先ではインターネット環境を考慮して履修者が多い講義はカメラをオフにしていたため、学生の反応をリアルな表情や空気感で知ることが出来ず、十分に理解してくれたか把握しにくい面もあった。そして何よりも学生達が友人と対面できないこと、入学式や卒業式といった人生の節目行事も行えないことが気の毒であった。2022 年からは対面授業の復活、新型コロナの様子を見ながらオンラインに

切り替えるといった講義形式であったが、やはり久しぶりに学生の様子を見て我々教員も安堵したものだ。学生も久しぶりに大学に来て友人と笑顔で語り合い、あるいは入学以来一度も登校していなかった学年は初めての登校に緊張しながらも笑顔であったことを覚えている。

また、学会や研究会、講演会等に目を向けても、2020 年は中止や延期が多かったように思う。2021 年になってからはオンライン開催が主流になった。臨場感が無く、懇親会も無い寂しい会ではあったが、一方で私のように地方に住んでいる人間にとっては移動時間が省け、自宅から参加できることがメリットであった。2022 年からはハイブリットが多くなり、学会等で久しぶりに懐かしい方々にお会いした時は、しみじみと嬉しかった。本財団の理事会もほとんどオンラインあるいはハイブリットでの開催であったが、理事会のような少人数の会議は、慣れてくるとオンラインやハイブリットでもまったく問題が無いように思われた。

今後もハイブリット形式の学会や理事会は継続されるのではないかと思う。この新しい会議形式は、新型コロナ対策がもたらした功罪の中で、功の一つであろう。老いも若きも皆遠隔に対応できる日が来るとは考えたことも無かった。

新型コロナの世界的な流行は私達の今までの常識を覆したが、そのような大きなうねりの中、新型コロナ研究助成など、変わりゆく時代に対応しながら精力的な活動を続けた本財団のこれまでの医学研究への大きな貢献に感謝し、今後益々の発展を祈念して稿を終える。

〔原稿受領日：2023 年 5 月 18 日〕

「片仮名言葉の氾濫」

公益財団法人 先進医薬研究振興財団　理事　**尾﨑　由基男**

（医療法人社団 協友会 笛吹中央病院附属 おひさま在宅クリニック院長、山梨大学 名誉教授）

この３年間世界はCOVID-19の流行により翻弄された。日本は他国に比べると被害はやや少なかったと言えようが、それでも多くの犠牲者を出し、また何度も出された行動制限により、人々の暮らしは大きな影響を受けた。強制力を持った行動制限以外にも、従順で衛生概念の強い日本人は、第２次大戦中と比較されるほどの社会全般の活動を自粛し、コロナ以前とは全く異なった生活様式を過ごすことになった。旅行、外食、集会、コンサートは軒並み中止。私にとっても、楽しみにしていた医師会の会合、学会、居酒屋で友人と過ごす機会などすべて無くなった。その一方、COVID-19の流行と共に急増したのが、片仮名言葉というか、英語の単語をそのまま日本語に移入した言葉である。自由を抑圧された状態に置かれ、ストレスが溜まってきたためか、これらコロナ関連の片仮名言葉に私は強いというか、我慢できないくらいの違和感を覚えた。片仮名言葉には、以前から疑問を持っていたが、歳のせいか、暇ができたせいか、ともかく怒りを感じるようになったのである。

「ナイター」とか、「ライスカレー」が和製英語の片仮名表記であることは知っていたが、これらはまあ許せる。しかし、COVID-19の流行後に政府、行政機関が使い始めた多くの片仮名言葉は、英語をそのまま片仮名表記したもので、耳障りで、しかも舌を噛みそうな長い単語もある。一例として、「ソーシャルディスタンス」があるが、この言葉に対しては古い漫才の言葉ではあるが「責任者、出てこい！」と叫びたくなるほど違和感がある。

もともと日本語は、外来語の語彙だらけであると言われている。6世紀ごろから中国との交流によって多くの漢語が日本語に取り入れられた。その時もある程度の混乱状態が起きたと思われるが、恐らく最初のうちは漢文が分かる教育レベルの高い階層に関わることであり、またその後、漢字を簡略化してやまと言葉を表記する平仮名、片仮名が生まれ、漢字交じりの日本語が徐々に民衆に広まっていったため、大きな問題は起きなかったと推測される。中世になるとポルトガル、オランダ、さらに江戸後期、明治時代になるとイギリス、アメリカなどの英語圏からの語彙が日本語に加わった。同じ意味の言葉は外来語として取り入れる必要がないので、外来語はこれまで日本には存在しない新たな概念、定義、物質などを示すことに使われる。外来語を表記するために最も簡単な方法は、発音をまねる片仮名言葉である。Economyならエコノミー、Carbonならカーボンとすれば良い。しかし、幕末、明治の偉人たちはそのような安易な方法はとらなかった。単語の本質的意味を理解して、漢字を用いた造語、翻訳を行ったのである。水素、酸素、白金、溶解、分析などの言葉を作った宇田川榕菴、そして自由、経済、演説、健康、文明開化などの多くの言葉（造語、翻訳）を作った福沢諭吉などが例として挙げられる。先人の偉大さ、また漢字という表意文字が無限の造語力を

持つことに驚かされる。

日本語にない概念、定義を外国の言語から導入するのだから、外来語はどのように翻訳しても当然違和感はある。その言葉に対応する漢字の単語がないのだから、漢字を使って表記した場合、すべての人が即座にその意味を理解するのはもともと困難であろう。「ソーシャルディスタンス」を社会的距離と訳すと社会における人間の精神、地位、貧富の距離と受け取られて、混乱、誤解を招く恐れがあるため、「ソーシャルディスタンス」と片仮名表記にするほうが良いという議論がある。この論点には思考する努力が欠けていると思う。「それならお前ならどうする？」と問われると、残念ながら私には先人たちのような漢字に対する造詣がなく、良い案を提示することができない。

最近私は中国語を勉強するようになった。権利、自由、民主などという単語は本来中国語にはなく（その概念、実態が社会に存在しなかったから）、幕末、明治時代の日本の先達が作った翻訳語をそのまま導入したものであることを知った。また中国語には日本語のような音を示す片仮名、平仮名がないため、外来語、外国人名の発音表記は発音の似ている漢字を使うため、すこし厄介である。一方、その表記上の不利がゆえに、造語に頼らざるを得ない。Research & Development（R & D）は日本語には適当な訳語がないが、中国語では研究と開発を組み合わせ、研发という造語を使っている。いま日本でよく使われる「サステナビリティ、sustainability」は高校英語でも教わりそうもない、かなり高級な単語であるが、さてサステナビリティと言われて日本の老人（一般の若者もか？）の何割が理解できるのであろうか？これを中国語では可持续性と表すが、これなら中国の田舎の老人でもその意味が解ろう。さて、「ソーシャルディスタンス」であるが、中国では社交距離と訳している。これなら日本語でも十分に理解できる造語（訳語）ではないだろうか。

まだ日本には西欧崇拝の傾向が残っている。最近はすこし減ってきたが、化粧品や衣服の宣伝に最近まで金髪、碧眼の女性が良く使われていた。片仮名外来語を使うと、なにか恰好が良い、教養があるように聞こえるためか、商業、メディア（宣伝媒体）のみならず、教育現場、行政機関でも片仮名外来語が氾濫している。このままでは、日本語の文書を書きながら、文章の半分は外来語で埋まってしまうように時代になることを危惧する。

「ポリシー」「エビデンス」、「ブレイクスルー」、「グローバルサーベイ」などなんでもかんでも安易に片仮名表記にするのは止めるべきである。「ポリティカル・コレクトネス」略して「ポリコレ」に至っては、笑わざるを得ないというか、悲しみを感じてくる。ここになんらの思考も努力も、存在しない。日本語で表記できるものはできる限り日本語を使う、適当な対応する日本語単語がない場合は造語をしようではないか。そのためには、ソーシャルメディア（これも片仮名外来語）や文科省（国語審議会が妥当か）などが何らかの組織を作り、多くの人の知恵を結集して、幕末、明治時代の偉人の造語、翻訳と同じようなことをしてはどうか。もともと日本語にない概念を現在使われていない日本語の単語で表すのであるから、当然使い始めの時は違和感があろう。しかし、この外来語に対して対応する日本語はこれであると定義して、使っていればすぐに慣れるはずである。日本にはすばらしい造語を作り出すことができる人材は豊富に存在し、また漢字という表意文字は、これまで存在しなかった概念や物を表記できる包容力があると信じている。

〔原稿受領日：2023 年 5 月 26 日〕

新型コロナパンデミックとウクライナ侵攻

公益財団法人 先進医薬研究振興財団　理事　**武田　雅俊**
（大阪河﨑リハビリテーション大学学長、仁明会精神衛生研究所所長、大阪大学名誉教授）

2019 年 12 月に発生した新型コロナウィルス感染症（COVID-19）は、世界で約 7 億人が感染し、約 700 万人が死亡した。わが国だけでも 3,500 万人が感染し、7 万 3 千人が死亡し、政府は 2020 年 5 月から 3 回の緊急事態宣言を発出し、感染者の隔離、人流や移動の制限、対面での集まりの制限などを要請し対策を講じてきたが、3 年間にわたり社会経済活動は大きく制限された。しかしながら、人類の叡智を集結した新型コロナ感染症対策により、ワクチンや治療薬が開発され、3 年半が経過した今ようやく終息の兆しが見え始め、政府は本年 5 月から新型コロナをこれまでの 2 類感染症から 5 類感染症に引き下げて、With Corona あるいは Post Corona の社会を迎えようとしている。

新型コロナウイルスパンデミックは、約百年前の 1918 年から 1920 年にかけてのスペイン風邪とよく比較される。スペイン風邪の大流行により、当時の世界人口の 1/3 にあたる 6 億人が感染し、4 千万人の死者数を数えた。わが国でも患者数 2,300 万人，死者 38 万人を記録した。1918 年は第一次世界大戦中であり、当事国は戦時下での情報統制のために感染情報が秘匿されていたが、スペインは中立国であり、当時のスペイン国王カルロス三世や大臣らが罹患し、スペインからの感染拡大情報がもたらされスペイン風邪の名で呼ばれることになった。もちろん、スペインからの発症でもなく、風邪でもなく、スペイン風邪の本態は A(H1N1) 亜型インフルエンザウィルスによるパンデミックであった。スペイン (風邪) インフルエンザは、1918 年 3 月頃から 1920 年頃まで全世界で流行した科学的に検証可能なインフルエンザパンデミックの中では史上最大のものであり、致死率は 2.5% 以上と推計されている。

スペイン風邪が最初にどこで出現したかの明確な証拠はないが、最初の流行の記録は 1918 年 3 月の米国カンザス州であり、ここから流行が始まったとする見方が一般的である。3 月は季節性インフルエンザの流行が終わる時期だが、この年は春を過ぎてもインフルエンザ患者数は減少せず、軍隊や刑務所での流行や、自動車工場の労働者が多数欠勤して業務に支障が出るなどの事態が起こり、米国社会は混乱に陥った。第一次世界大戦に参戦するため米国から何十万人もの兵士が軍艦に乗り大西洋を超えてヨーロッパの戦場に向かったが、その中にはインフルエンザにかかった者も多く含まれていた。こうしてウイルスは 4 月から 5 月にかけて米国からヨーロッパへと拡散し、同年 6 月頃までにアフリカ、アジア、南米まで拡がり、地球規模のパンデミックになった。多くの都市ではインフルエンザにより、工場労働者の多量欠勤による産業機能低下、病院の医師・看護師、電信電話会社員、警察官、鉄道員、ごみ収集者、遺体埋葬業者などの罹患により公共サービスが著しく低下した。第 1 波に比べて第 2 波で致死率が高くなった理由は、ウイルスが人に対し高病原性に変異した可能性や、第 2 波が本来インフルエンザの流行する寒い時期と重なったことなど様々な可能性が指摘されているが、よく解っていない。その後、スペイン風邪インフルエンザの勢いは徐々に衰え、住民の大部分が免疫を獲得するとともに病原性も低下して季節性インフルエンザに移行し、

1957 年にアジアインフルエンザが出現するまで季節性インフルエンザとして毎年流行し続けた。

スペイン風邪の流行は第一次世界大戦の最中に起こり、参戦国の兵士に甚大な被害をもたらし戦局に大きな影響を与えただけでなく、第一次大戦後の世界の動向にも大きな影響を与えたと言われている。第一次大戦の講和条約策定は、1919 年 1 月からのウィルソン米国大統領、デビッド・ロイド・ジョージイギリス首相、ジョルジュ・クレマンソーフランス首相ら連合国首脳により 6 か月にわたって協議された。この協議ではドイツに大きな負担を負わせて自国の安全保障を図ろうとするクレマンソーの主張と、行き過ぎた懲罰に反対し、自らの「公正な講和」概念を貫こうとするウィルソンの二つの路線が対立したのであるが、ウィルソン米国大統領がスペイン風邪に罹患して体調が万全でなかったことから、連合国が支払った膨大な戦費や損害、賠償とドイツに対する懲罰を要求する英仏両国の主張に沿った内容となったと言われている。後世の見方として、ドイツに対する過大な賠償と懲罰を要求したベルサイユ条約が、ドイツにおけるヒットラーの台頭の素地になったという説もある。

去年からのもう一つの大きな出来事はロシアによるウクライナ侵攻である。2022 年 2 月 24 日にロシアはウクライナに軍事侵攻を始めた。ウクライナは、1991 年、ソビエト連邦の崩壊に伴い独立して新たな国家となったのであるが、もともとはキエフ大公国としてロシアと共通する文化と歴史を有しており、お互いに兄弟のような国である。独立後は親ロシア政権と反ロシア政権が入れ替わり立ち替わり、政治的に不安定な状況であったが、2014 年に親ロシア派のヤヌコーヴィッチ政権が崩壊した時に、ロシアのプーチン大統領は、クリミア半島内のロシア系住民を保護するとの名目で軍事介入し、ウクライナ東部・南部での反政府派と親政府派との衝突が発生した。2019 年に就任したウォロディミル・ゼレンスキー大統領は、クリミア半島のウクライナへの再統合をめざす国家戦略を掲げて NATO 加盟を目指すことを宣言した。ウクライナの NATO 加盟をめぐってロシアとウクライナの緊張が高まり、アメリカのバイデン大統領がプーチン大統領と会談してなんとか事態を収拾しようと努めたものの、戦争回避の合意に至らず、2022 年 2 月 24 日、プーチン大統領は特別軍事作戦と称して、ウクライナ全土へ空襲やミサイル攻撃を仕掛けてしまった。そして、この戦争は泥沼化し一年半が経過した今でも和平への道筋は見えていない。無能な指導者により多くの人々の命が失われており、人類の愚かさを示している一例であろう。

新型コロナパンデミックとウクライナ戦争は、世界中の人々に大きな負担を強いている。二つの対照的な出来事が示していることは、この百年間で科学技術や医療は進歩したものの、人類の感性や判断は未熟なままであったということかもしれない。人の命は地球よりも重いという、人類が共有すべき重要な判断力が育っておらず、お互いを殺し合うという悲劇を繰り返してしまう人類の愚かさを見せつけられているような気がしてしまうのは筆者だけであろうか。

〔原稿受領日：2023 年 6 月 9 日〕

2022 年度 事業報告並びに決算報告

2022 年度の事業計画にもとづき実施しました助成事業、研究報告会、刊行物等の概要は、次のとおりであります。

1. 運営に関する事項

第 23 回 通常理事会	令和3年度（第54年度）「事業報告書」の承認 令和3年度（第54年度）「決算報告書」並びに「監査報告書」の承認	2022 年 5 月 13 日 （大阪・オンライン会議併用）
第 12 回 定時評議員会	評議員の選任 役員の選任 令和3年度（第54年度）「決算報告書」並びに「監査報告書」の承認	2022 年 6 月 3 日 （大阪・オンライン会議併用）
第 23 回 臨時理事会	業務執行理事の選定	2022 年 6 月 3 日 （大阪・オンライン会議併用）
第 24 回 通常理事会	2022 年度「精神薬療分野」助成金の交付決定 2022 年度「血液医学分野」助成金の交付決定 2022 年度「循環医学分野」助成金の交付決定 2022 年度「先進研究助成」助成金の交付決定 諸規則改定の承認 「選考委員」の選任 「先進医薬研究報告会審査会」審査委員の選任 2023 年度 定時評議会開催の承認	2022 年 11 月 11 日 （大阪・オンライン会議併用）
第 24 回 臨時理事会	2023年度（第56年度）「事業計画」及び「予算」の承認 2022 年度「海外留学助成」助成金変更の承認	2023 年 2 月 16 日 （大阪・オンライン会議併用）

2. 助成事業に関する事項

1）精神薬療分野

一般研究助成（第55回） COVID-19関連一般研究助成（第2回） 若手研究者助成（第16回） 海外留学助成（第26回）	募集期間	2022 年 4 月 1 日～6 月 15 日	
	評価	精神薬療選考委員	2022 年　7 月　4 日 ～　8 月　16 日
	選考	精神薬療選考委員会 （オンライン会議併用）	2022 年　9 月 17 日
	交付決定	第 24 回 通常理事会	2022 年　11 月 11 日
	助成額と件数	一般研究助成　2,000万円　交付件数　20件（応募件数　98件） COVID-19関連一般研究助成　200万円　交付件数　2件（応募件数　5件） 若手研究者助成　1,000万円　交付件数　10件（応募件数　50件） 海外留学助成　1,000万円　交付件数　2件（応募件数　9件）	
	交付	2022 年 12 月	

2）血液医学分野

一般研究助成（第41回） COVID-19関連一般研究助成（第2回） 若手研究者助成（第24回） 海外留学助成（第40回）	募集期間	2022年4月1日～6月15日	
	評価	血液医学選考委員	2022年 7月 4日 ～ 8月 16日
	選考	血液医学選考委員会 （オンライン会議併用）	2022年 10月 1日
	交付決定	第24回 通常理事会 第24回 臨時理事会	2022年 11月11日 2023年 2月16日
	助成額と件数	一般研究助成 2,100万円 交付件数 21件（応募件数 78件） COVID-19関連一般研究助成 300万円 交付件数 3件（応募件数 8件） 若手研究者助成 1,100万円 交付件数 11件（応募件数 39件） 海外留学助成 500万円 交付件数 1件（応募件数 4件）	
	交付	2022年12月	

3）循環医学分野

一般研究助成（第21回） COVID-19関連一般研究助成（第2回） 若手研究者助成（第21回） 海外留学助成（第17回）	募集期間	2022年4月1日～6月15日	
	評価	循環医学選考委員	2022年 7月 4日 ～ 8月 16日
	選考	循環医学選考委員会 （オンライン会議併用）	2022年 9月10日
	交付決定	第24回 通常理事会	2022年 11月11日
	助成額と件数	一般研究助成 2,000万円 交付件数 20件（応募件数 73件） COVID-19関連一般研究助成 200万円 交付件数 2件（応募件数 2件） 若手研究者助成 1,000万円 交付件数 10件（応募件数 52件） 海外留学助成 1,000万円 交付件数 2件（応募件数 15件）	
	交付	2022年12月	

4）先進研究助成

先進研究助成（第6回）	募集期間	2022年4月1日～6月15日	
	評価	先進研究選考委員	2022年 7月 4日 ～ 8月 16日
	選考	先進研究選考委員会 （オンライン会議併用）	2022年 9月10日
	交付決定	第24回 通常理事会	2022年 11月11日
	助成額と件数	先進研究助成 1,000万円 交付件数 1件（応募件数 9件）	
	交付	2022年12月	

5）若手研究者継続助成

「若手研究者」継続助成	審査	分科会委員	2022年 11月18日 ～ 12月 5日
	交付決定	審査委員会（書面表決）	2022年 12月 6日
	助成額と件数	精神薬療分野 100万円 交付件数 1件（応募件数 9件） 血液医学分野 100万円 交付件数 1件（応募件数 8件） 循環医学分野 100万円 交付件数 1件（応募件数 9件）	
	交付	2022年12月	

3. 研究報告会に関する事項

第６回　先進医薬研究報告会の開催

日　　時	2022年12月9日（金）　14：00 ～ 16：15
開 催 形 式	Ｚｏｏｍ オンライン開催
助成者発表	・継続助成金受領者 ・2022年度助成対象者
COVID-19 関連特別研究報告	2演題
平成 31 年度　先進研究報告	1演題

4. 刊行物に関する事項

機関誌「先進医薬年報」No.23	2022年8月20日発行	900部
2022 年度　研究成果報告集	2023年3月25日発行	5部

財団ホームページ（https://www.smrf.or.jp/）に公開

貸　借　対　照　表

（2023 年 3 月 31 日現在）

（単位：円）

科　　目	当 年 度 （A）	前 年 度 （B）	増　減 （A）－（B）
Ⅰ　資産の部			
1．流動資産			
現金預金	44,802,292	50,183,557	△5,381,265
仮払金	309,041	－	309,041
前払費用	5,000,000	5,000,000	0
流動資産合計	50,111,333	55,183,557	△5,072,224
2．固定資産			
(1) 基本財産			
定期預金	323,351,257	322,942,942	408,315
投資有価証券	676,648,743	677,057,058	△408,315
基本財産合計	1,000,000,000	1,000,000,000	0
(2) 特定資産	－	－	－
(3) その他固定資産	－	－	－
固定資産合計	1,000,000,000	1,000,000,000	0
資産合計	1,050,111,333	1,055,183,557	△5,072,224
Ⅱ　負債の部			
1．流動負債			
預り金	－	5,000,000	△5,000,000
流動負債合計	－	5,000,000	△5,000,000
2．固定負債	－	－	－
負債合計	－	5,000,000	△5,000,000
Ⅲ　正味財産の部			
1．指定正味財産			
寄附金	1,000,000,000	1,000,000,000	0
（うち基本財産への充当額）	(1,000,000,000)	(1,000,000,000)	(0)
（うち特定資産への充当額）	(－)	(－)	(－)
2．一般正味財産	50,111,333	50,183,557	△72,224
（うち基本財産への充当額）	(－)	(－)	(－)
（うち特定資産への充当額）	(－)	(－)	(－)
正味財産合計	1,050,111,333	1,050,183,557	△72,224
負債及び正味財産合計	1,050,111,333	1,055,183,557	△5,072,224

正味財産増減計算書

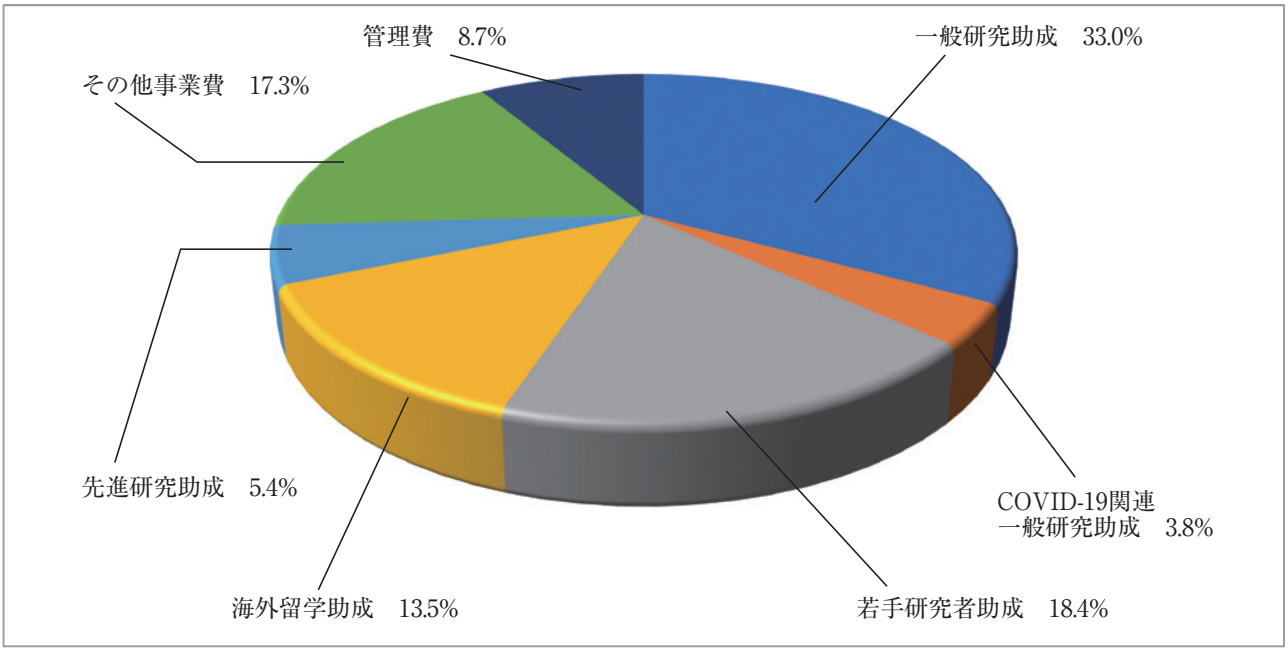
（2022 年 4 月 1 日から 2023 年 3 月 31 日まで）

（単位：円）

科　　目	当 年 度 （A）	前 年 度 （B）	増　減 （A）－（B）
Ⅰ　一般正味財産増減の部			
1．経常増減の部			
(1) 経常収益			
基本財産運用益			
基本財産受取利息	4,043,799	4,003,046	40,753
受取会費			
賛助会費	394,000	436,000	△42,000
受取寄附金			
寄附金	180,000,000	180,000,000	0
雑収益			
預・貯金利息	807	778	29
経常収益計	184,438,606	184,439,824	△1,218
(2) 経常費用			
事業費	168,903,610	172,148,210	△3,244,600
役員報酬	3,360,000	3,360,000	0
給料手当	7,840,000	5,880,000	1,960,000
会議費	6,324,191	4,396,146	1,928,045
交通費	983,631	147,642	835,989
通信運搬費	303,991	300,082	3,909
印刷製本費	3,310,589	3,262,734	47,855
賃借料	1,395,240	1,349,246	45,994
システム利用管理費	1,494,612	1,490,660	3,952
諸謝金	1,191,659	1,213,933	△22,274
選考料	5,691,007	5,691,007	0
支払助成金	137,000,000	145,000,000	△8,000,000
雑費	8,690	56,760	△48,070
管理費	16,029,905	11,884,888	4,145,017
役員等報酬	3,143,961	2,442,330	701,631
給料手当	3,360,000	2,520,000	840,000
会議費	1,797,279	910,887	886,392
交通費	2,263,448	303,840	1,959,608
通信運搬費	450,121	338,027	112,094
消耗品費	409,520	395,010	14,510
諸会費	255,624	170,584	85,040
光熱水道費	43,194	138,704	△95,510
賃借料	597,960	578,248	19,712
システム利用管理費	735,656	317,924	417,732
諸謝金	100,233	100,233	0
報酬等	2,321,700	1,146,900	1,174,800
雑費	551,209	2,522,201	△1,970,992
経常費用計	184,933,515	184,033,098	900,417
評価損益等調整前当期経常増減額	△494,909	406,726	△901,635
基本財産評価損益等	－	－	－
特定資産評価損益等	－	－	－
投資有価証券評価損益等	－	－	－

評価損益等計	－	－	－
当期経常増減額	△494,909	406,726	△901,635
2．経常外増減の部			
(1) 経常外収益			
投資有価証券償還益	422,685	－	422,685
経常外収益計	422,685	－	422,685
(2) 経常外費用			
経常外費用計	－	－	－
当期経常外増減額	422,685	－	422,685
他会計振替前当期一般正味財産増減額	△72,224	406,726	△478,950
他会計振替額	－	－	－
当期一般正味財産増減額	△72,224	406,726	△478,950
一般正味財産期首残高	50,183,557	49,776,831	406,726
一般正味財産期末残高	50,111,333	50,183,557	△72,224
Ⅱ 指定正味財産増減の部			
受取寄附金	180,000,000	180,000,000	0
一般正味財産へ振替	△ 180,000,000	△ 180,000,000	0
当期指定正味財産増減額	0	0	0
指定正味財産期首残高	1,000,000,000	1,000,000,000	0
指定正味財産期末残高	1,000,000,000	1,000,000,000	0
Ⅲ 正味財産期末残高	1,050,111,333	1,050,183,557	△72,224

【経常費用の内訳】



2022年度 選考委員会報告

精神薬療分野の助成選考経過

選考委員長　上野　修一

2022 年度募集は例年通り、2022 年 4 月 1 日（金）～ 6 月 15 日（水）に行われました。また、昨年度に引き続き COVID-19 関連一般研究助成を追加募集致しました。

まず、全体での応募総数は昨年度より 8 件少ない 162 件でした。第 55 回 一般研究助成には 98 件（区分 1：精神疾患の病因、病態に関連する研究（遺伝子研究を含む） － 65 件　区分 2：精神疾患の症状、診断、治療に関連する研究（症例研究や疫学研究を含む） － 33 件）、第 16 回 若手研究者助成に 50 件（区分 1 － 27 件　区分 2 － 23 件）、第 26 回 海外留学助成に 9 件、そして、第 2 回 COVID-19 関連一般研究助成には 5 件（区分 1 － 2 件　区分 2 － 3 件）の応募がありました。

一般研究助成と若手研究者助成については、申請書をランダムに 2 グループに分け、1 グループ 5 名の選考委員で評価を行いました。COVID-19 関連一般研究助成および海外留学助成については選考委員全員で評価しています。一般研究助成では、＜独創性＞、＜計画の妥当性＞、＜臨床への貢献度＞に分け評価し、若手研究者助成では、＜新規性＞および＜計画の妥当性＞、海外留学助成は＜研究実績＞および＜企画・発展性＞の各項目について 5 段階で評価しております。

選考委員会は、2022 年 9 月 17 日（土）に開催致しました。一昨年度および昨年度は、新型コロナウイルス感染症の影響から完全にオンラインでの選考でしたが、2022 年度は対面およびオンラインによるハイブリット形式にて開催致しました。同一施設から複数件の申込みがあったものは、一般研究助成で 3 施設から 6 件、若手研究者助成で 1 施設から 2 件ありましたが、各施設の評価合計点の高い 1 件のみを審査対象とすることに委員全員が賛同し、選考を行いました。一般研究助成および若手研究者助成については、評価した 2 グループ間で評価合計点に統計上の有意差がないことを確認したうえで、両グループの評価合計点に基づき順位付けを行いました。その結果、理事会に答申する交付案を、以下の通り委員全員一致で決定致しました。

【交付案】

1）一般研究助成は、評価点順位 1 位～ 20 位の 20 名に各 100 万円を交付する。
　＜区分 1 － 13 件、区分 2 － 7 件＞
2）COVID-19 関連一般研究助成は、評価点順位 1 位、2 位の 2 名に各 100 万円を交付する。
　＜区分 1 － 1 件、区分 2 － 1 件＞
3）若手研究者助成は、評価点順位 1 位～ 10 位の 10 名に各 100 万円を交付する。
　＜区分 1 － 6 件、区分 2 － 4 件＞
4）海外留学助成は、評価点順位 1 位、2 位の 2 名に各 500 万円を交付する。

なお、2022 年 11 月 11 日（金）開催の通常理事会において本交付案が承認され、2022 年度の精神薬療分野助成事業の助成金交付対象者が決定しております。2022 年度をもちまして、COVID-19 関連 一般研究助成の募集は終了となり、2023 年度からは一般研究助成、若手研究者助成および海外留学助成の例年通りの募集となります。引き続きたくさんのご応募をお待ちしております。

2022 年度　精神薬療分野の助成金受領者

■第 55 回　一般研究助成　＜交付件数：20 件、助成額：2,000 万円＞

＊応募区分 1：精神疾患の病因、病態に関連する研究（遺伝子研究を含む）
＊応募区分 2：精神疾患の症状、診断、治療に関連する研究（症例研究や疫学研究を含む）

【統合失調症】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	区分＊	助成額（万円）
久島　　周	名古屋大学医学部附属病院ゲノム医療センター	全ゲノムシーケンス解析に基づく統合失調症・自閉スペクトラム症の病因・病態解明	1	100
久保健一郎	東京慈恵会医科大学医学部解剖学講座	先進的解析技術を用いた精神疾患の分子細胞病態の探索	1	100
武井　雄一	群馬大学医学系研究科神経精神医学教室	治療抵抗性統合失調症を対象とした安静時脳機能ネットワークのグラフ理論解析研究	1	100
溝口　博之	名古屋大学医学部附属病院薬剤部	統合失調症における Reelin シグナルの機能回復に向けた新たな治療戦略の開発	1	100
山本　直樹	国際医療福祉大学　基礎医学研究センター　薬物治療学分野	ムーンライティングタンパク質機能に着目した急性期緊張病型精神病の病態解明	1	100

【気分障害】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	区分＊	助成額（万円）
岩田　仲生	藤田医科大学医学部精神神経科学講座	双極 I 型・II 型障害と他の精神疾患の相関：cross-disease・population 遺伝的相関解析	1	100
影山　祐紀	大阪公立大学大学院医学研究科神経精神医学	リキッドバイオプシーとミトコンドリア機能障害に基づく双極性障害バイオマーカー探索	2	100
加藤　正樹	関西医科大学医学部精神神経科	適切なゴールを目指した、オミックスと長期評価による気分障害の革新的治療	2	100
朴　　秀賢	熊本大学大学院生命科学研究部神経精神医学講座	アストロサイトに着目した電気けいれん療法の作用機序解明	1	100
吉村　玲児	産業医科大学精神医学教室	エキソソーム内包 miRNA-mRNA-オミックス解析から薬物反応を探る	2	100

【脳器質疾患・認知症】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	区分*	助成額（万円）
草苅　伸也	東京医科大学医学部 薬理学分野	前頭側頭型認知症原因因子CHCHD10の新たな生理機能と認知症発症との関係解明	1	100
佐藤　栄人	順天堂大学医学部 疾患モデル研究室	フェロトーシス制御による認知症治療戦略	1	100
竹内　啓善	慶應義塾大学医学部 精神・神経科学教室	高齢者のせん妄におけるトラゾドンの有効性と安全性の検討：クエチアピン対照二重盲検無作為化比較試験	2	100
田中　稔久	三重大学医学部 神経・筋病態学講座	タウオパチーにおける形態特異的タウ重合モデルの開発	1	100
東山　雄一	横浜市立大学医学部 神経内科学・脳卒中医学	先進的脳画像・症候・遺伝子解析によるパーキンソン病の認知症進展予測マーカーの開発	2	100
森　　隆	埼玉医科大学総合医療センター 研究部・病理部	アルツハイマー病：アポリポ蛋白Eを標的とした革新的ペプチド療法の確立	2	100

【発達障害】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	区分*	助成額（万円）
前川　素子	東北大学医科学専攻 細胞生物学講座・器官解剖学分野	「脂肪細胞-脳軸」に着目した自閉症病態形成メカニズムの解明	1	100

【その他】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	区分*	助成額（万円）
佐久間　啓	東京都医学総合研究所 脳・神経科学研究分野	小児のautoimmune psychosisに関する実態調査	2	100
西村　周泰	同志社大学大学院脳科学研究科 脳機能回路創出部門	多領域脳オルガノイドを用いたシヌクレイノパチー分子病態の解明	1	100
桝　　正幸	筑波大学医学医療系 生命医科学域	細胞外糖鎖修飾酵素によるドーパミンシグナル調節機構の解明	1	100

■第 2 回 COVID-19 関連一般研究助成　＜交付件数：2 件、助成額：200 万円＞

＊応募区分 1：精神疾患の病因、病態に関連する研究（遺伝子研究を含む）
＊応募区分 2：精神疾患の症状、診断、治療に関連する研究（症例研究や疫学研究を含む）

【気分障害】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	区分＊	助成額（万円）
蔡　　林	東京大学総合文化研究科 進化認知科学研究センター	新型コロナウイルス感染症による社会環境―脳―精神―行動の階層的変化の解明	1	100

【その他】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	区分＊	助成額（万円）
堺　　景子	大阪河﨑リハビリテーション大学 リハビリテーション学部 作業療法学専攻	Long COVID 関連症状の病態機序および発症に影響を与える要因の解明	2	100

■第 16 回　若手研究者助成　＜交付件数：10 件、助成額：1,000 万円＞

＊応募区分 1：精神疾患の病因、病態に関連する研究（遺伝子研究を含む）
＊応募区分 2：精神疾患の症状、診断、治療に関連する研究（症例研究や疫学研究を含む）

【統合失調症】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	区分＊	助成額（万円）
越山　太輔	東京大学大学院医学系研究科 脳神経医学専攻　精神医学分野	拡散強調画像を用いた統合失調症における神経生理学的異常所見の神経基盤の解明	1	100
Zhu　Yinghan	東京大学総合文化研究科 附属進化認知科学研究センター	精神疾患脳画像機械学習器のライフコースデータへのあてはめ	2	100
阪東　勇輝	浜松医科大学医学部医学科 器官組織解剖学講座	統合失調症感受性イオンチャネル・Cav1.2による大脳皮質領野間相互作用制御機構	1	100
吉川　　茜	順天堂大学医学部附属順天堂医院 精神医学講座	臨床ゲノム解析による治療抵抗性統合失調症の層別化	1	100
吉野　祐太	愛媛大学大学院医学系研究科 精神神経科学	統合失調症における正常圧水頭症の有病率調査、及び共通する病態の解明	2	100

【気分障害】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	区分＊	助成額（万円）
梶谷　直人	熊本大学大学院生命科学研究部 健康長寿代謝制御研究センター	うつ病の新しい治療ターゲットHippo経路の解明	2	100
富永　香菜	山口大学医学系研究科 高次脳機能病態学講座	気分障害の病態生理の解明につながるエクソソームの機能解析	1	100

【脳器質疾患・認知症】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	区分＊	助成額（万円）
田中　良法	岡山理科大学獣医学部 獣医学科　生化学講座	抗がん剤アベマシクリブを用いたFTLD-TDP療法の開発	2	100

【その他】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	区分＊	助成額（万円）
臼井　紀好	大阪大学大学院医学系研究科 神経細胞生物学講座	薬物依存における耐性獲得メカニズムの解明	1	100
塩飽　裕紀	東京医科歯科大学医歯学総合研究科　精神行動医科学分野	疼痛性障害の自己抗体病態の解明	1	100

■ 2022 年度　若手研究者継続助成　＜交付件数：1 件、助成額：100 万円＞

＊応募区分 1：精神疾患の病因、病態に関連する研究（遺伝子研究を含む）
＊応募区分 2：精神疾患の症状、診断、治療に関連する研究（症例研究や疫学研究を含む）

【脳器質疾患・認知症】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	区分＊	助成額（万円）
北西　卓磨	東京大学大学院総合文化研究科 先進科学研究機構	記憶情報の脳内伝達とその破綻・回復のメカニズム	1	100

■第 26 回　海外留学助成　＜交付件数：2 件、助成額：1,000 万円＞

研究者名	所　属　機　関 （留学先）	研　究　課　題	助成額 （万円）
舟橋　　裕	愛媛大学 精神神経科学講座 University of Alabama at Birmingham, U.S.A.	機能性精神疾患の病態解明およびバイオマーカーの開発	500
吉松　　祥	慶應義塾大学医学部 生理学教室 MIT McGovern Institute for Brain Research, U.S.A.	霊長類脳における神経老化制御メカニズムの解明	500

血液医学分野の助成選考経過

選考委員長　浅田　祐士郎

2022 年度も昨年度に引き続き COVID-19 関連研究（治療、予防、診断）の研究振興を目的として、COVID-19 関連一般研究助成を追加募集しました。

2022 年 4 月 1 日～ 6 月 15 日に公募を開始し、一般研究助成に 78 件（第 1 グループ：血栓止血・血管機能とその関連領域、輸血・細胞療法とその関連領域、血液・血管に関する再生医学－ 39 件　第 2 グループ：感染・免疫・アレルギーとその関連領域－ 39 件）、COVID-19 関連一般研究助成に 8 件（第 1 グループ－ 2 件　第 2 グループ－ 6 件）、若手研究者助成に 39 件（第 1 グループ－ 20 件　第 2 グループ－ 19 件）、海外留学助成に 4 件の応募がありました。残念なことに全ての募集分野で昨年度より減少しました。特に COVID-19 関連一般研究助成および海外留学助成は昨年度の 3 分の 1 でした。

一般研究助成および若手研究者助成は各グループ 5 名ずつの選考委員で評価を行い、COVID-19 関連一般研究助成および海外留学助成については選考委員全員で評価しました。

2022 年 10 月 1 日に会場参加型およびオンライン参加型のハイブリット形式の選考委員会を開催いたしました。一般研究助成において同一施設から 2 件の応募があったものについては、評価合計点の高い方を審査対象とすることに決定しました。2 グループ間で評価合計点に統計上の有意差がないことを確認したうえで、両グループの評価合計点に基づいて順位付けを行いました。

【交付案】

1）一般研究助成は、評価点順位 1 位～ 20 位の 20 名に各 100 万円を交付する。
　＜第 1 グループ－ 11 件、第 2 グループ－ 9 件＞
2）COVID-19 関連一般研究助成は、評価点順位 1 位、2 位の 2 名に各 100 万円を交付する。
　＜第 1 グループ－ 0 件、第 2 グループ－ 2 件＞
3）若手研究者助成は、評価点順位 1 位～ 10 位の 10 名に各 100 万円を交付する。
　＜第 1 グループ－ 6 件、第 2 グループ－ 4 件＞
4）海外留学助成は、評価点順位 1 位、2 位の 2 名に各 500 万円を交付する。

2022 年 11 月 11 日開催の通常理事会において上記の選考交付案が承認されましたが、本理事会後に海外留学助成金交付対象者 1 名が辞退されました。2023 年 2 月 16 日に開催しました臨時理事会にて海外留学助成の未執行予算 500 万円の使途について議論されました。その結果、選考委員会で決定していました一般研究助成、COVID-19 関連一般研究助成および若手研究者助成の次点候補者各 1 名に追加交付（1 件 100 万円、計 300 万円）することが可決されました。

血液医学分野の応募が年々減少傾向にあることに危惧を覚えています。来年度は是非とも多くの応募があることを期待いたします。

2022 年度　血液医学分野の助成金受領者

■第 41 回　一般研究助成　＜交付件数：21 件、助成額：2,100 万円＞

【血栓止血・血管機能（各種臓器の生理、病態など）とその関連領域】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	助成額（万円）
稲城　玲子	東京大学医学系研究科 CKD 病態生理学講座	腎臓病患者エクソソームに基づく新たな血管恒常性維持機構の解明	100
柏倉　裕志	自治医科大学医学部 生化学講座　病態生化学部門	FVIII の異所性発現における ER ストレス応答メカニズムの解明と血友病 A 治療への応用	100
山崎　泰男	国立循環器病研究センター 分子病態部	血管内皮細胞に含まれる分泌性膜小胞 Weibel-Palade 小体の形成機構の解明	100
吉本敬太郎	東京大学大学院総合文化研究科 広域科学専攻　生命環境科学系	血液凝固因子の分子結合能を模倣するバイスペシフィック核酸アプタマーの設計と機能評価	100

【輸血・細胞療法とその関連領域】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	助成額（万円）
加藤　貴康	筑波大学医学医療系 血液内科・臨床検査医学	‘脂質の質’をターゲットとした新規白血病治療法の開発	100
黒田　純也	京都府立医科大学 血液内科学教室	造血器腫瘍に対する細胞免疫療法を強化する miRNA インヒビターカクテル療法の開発	100
知念　孝敏	九州大学 病態制御内科学	人工受容体研究によって挑む炎症と腫瘍の制御	100
中山　幸輝	東京大学医学部付属病院 循環器内科	心不全全身合併症の治療標的同定のための造血幹細胞ニッチの分子機構の解明	100

【血液・血管に関連する再生医学】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	助成額（万円）
梅本　晃正	熊本大学国際先端医学研究機構 造血幹細胞工学研究室	クロマチン動態制御を基盤とした造血幹細胞のトロンボポイエチン作用決定機構	100
高橋　淑子	京都大学大学院理学研究科 生物科学専攻	血流マイクロダイナミクスが制御する血管リモデリングのしくみ	100
松村　貴由	自治医科大学　炎症免疫研究部 兼　循環器内科	ミトコンドリアに着目した老化造血幹細胞多様性のシングルセル解析	100

【感染・免疫・アレルギーとその関連領域】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	助成額（万円）
伊勢　　渉	大阪大学感染症総合教育研究拠点	プラズマ細胞の移動と生存を制御する新しいメカニズム	100
伊藤　量基	関西医科大学 内科学（第一講座）	樹状細胞の視点からのBCL-2ターゲット治療の免疫抑制機序解明	100
黒滝　大翼	熊本大学国際先端医学研究機構 免疫ゲノム構造学研究室	炎症性樹状細胞の感染防御と血球貪食症候群における役割の解明	100
河野　通仁	北海道大学病院 リウマチ・腎臓内科	患者由来直接誘導ミクログリア様細胞を用いた精神神経ループスの病態関与	100
柴田　　彩	東京大学大学院医学系研究科 皮膚科学	エピジェネティクス制御因子を介したType3型の皮膚免疫異常	100
須藤　　明	千葉大学大学院医学研究院 アレルギー・臨床免疫学	IL-17産生γδT細胞を制御するブチロフィリン蛋白の同定と免疫疾患治療基盤構築	100
田中　真司	東京大学医学部附属病院 腎臓・内分泌内科	炎症性腎疾患において腎神経が果たす役割の解明	100
藤原　英晃	岡山大学病院 血液・腫瘍内科	免疫性細胞障害による新たな細胞死から組織を守る癌治療法の確立	100
細川　裕之	東海大学医学部　基礎医学系 生体防御学	Notchシグナルが転写因子PU.1の機能をダイナミックに変化させる分子基盤	100
本田　知之	岡山大学学術研究院医歯薬学域	外来性ウイルスによる内在性ウイルスを介した神経機能異常の解明	100

■第 2 回 COVID-19 関連一般研究助成　＜交付件数：3 件、助成額：300 万円＞

【感染・免疫・アレルギーとその関連領域】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	助成額（万円）
石田　竜弘	徳島大学大学院医歯薬学研究部（薬学域）　薬物動態制御学分野	COVID19ワクチン投与による抗PEG抗体の誘導 とアナフィラキシー反応に関する研究	100
植木　紘史	東京大学医科学研究所ウイルス感染部門	２光子生体イメージングで解明するCOVID-19肺炎の病態メカニズム	100
新中須　亮	愛媛大学　学術支援センター医科学研究支援部門感染症研究支援分野	SARS関連ウイルス万能Ｂ細胞の効率的活性化誘導のためのヘルパーＴ細胞抗原設計法の確立	100

■第 24 回　若手研究者助成　＜交付件数：11 件、助成額：1,100 万円＞

【血栓止血・血管機能（各種臓器の生理、病態など）とその関連領域】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	助成額（万円）
高橋　智子	慶應義塾大学医学部 解剖学	遺伝子改変マウスを用いた歯周病態イメージング解析による新生血管の同定	100
長屋　聡美	金沢大学医薬保健研究域 保健学系	遺伝子組み換え型活性化プロテインCの細胞保護効果と治療への応用	100
久田　　諒	北海道大学病院 リウマチ・腎臓内科	細胞内代謝、特にGlycolysisを標的とした抗リン脂質抗体症候群の新規治療開発	100
丸山　慶子	国立循環器病研究センター 分子病態部	Protein S遺伝子のイントロン1に潜む未知の発現調節機構の解明	100

【輸血・細胞療法とその関連領域】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	助成額（万円）
安藤　　眞	慶應義塾大学医学部 微生物学免疫学教室	T細胞疲弊の制御によるリプログラミング法の開発と固形がん治療への応用	100
伊藤　雄介	愛知県がんセンター研究所 がん医療創生基盤開発領域 腫瘍免疫応答研究分野	がん微小環境を複合的に制御するナノ粒子プラットフォーム開発	100
齋藤　清香	熊本大学国際先端医学研究機構 幹細胞プロテオスタシス研究室	貧血ストレスに対する造血幹細胞の応答機構の解明	100

【感染・免疫・アレルギーとその関連領域】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	助成額（万円）
安部　佳亮	筑波大学 血液内科	大規模マルチオミクス解析によるリンパ腫免疫環境変化の探索	100
佐伯　法学	愛媛大学プロテオサイエンスセンター　病態生理解析部門	マクロファージを基盤とした関節リウマチに生じる性差機構の解明	100
鈴木　秀文	横浜市立大学大学院医学研究科 分子生物学分野	転写伸長因子MED26の異所性液滴形成が混合型急性白血病を引き起こす分子機構の解明	100
森　　大輝	大阪大学感染症総合教育研究拠点 感染症・生体防御研究部門 生体応答学チーム	濾胞性ヘルパーT細胞の記憶細胞分化機構の解明	100

■ 2022 年度　若手研究者継続助成　＜交付件数：1 件、助成額：100 万円＞

【血栓止血・血管機能（各種臓器の生理、病態など）とその関連領域】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	助成額（万円）
藤原　隆行	東京大学医学部附属病院 循環器内科	時空間的マルチスケールイメージングによる難治性循環器疾患の病態解明	100

■第 40 回　海外留学助成　＜交付件数：1 件、助成額：500 万円＞

研究者名	所　属　機　関 （留学先）	研　究　課　題	助成額 （万円）
高田　　剛	東北大学大学院医学系研究科 環境医学分野 Department of Physiology Indiana University School of Medicine, U.S.A.	NADPHオキシダーゼおよびNO合成酵素による超硫黄活性化と感染防御機能の解明	500

循環医学分野の助成選考経過

選考委員長　**安斉　俊久**

2022 年度の循環医学分野助成は、2022 年 4 月 1 日～ 6 月 15 日の期間で募集を行いました。また、昨年に引き続き新型コロナウイルスの研究振興を図る目的で、COVID-19 関連一般研究助成の募集を追加しました。

一般研究助成に 73 件（第 1 グループ：脳血管障害及びその関連領域－ 17 件　第 2 グループ：心疾患及びその関連領域－ 56 件）、COVID-19 関連一般研究助成に 2 件（第 1 グループ－ 0 件　第 2 グループ－ 2 件）、若手研究者助成に 52 件（第 1 グループ－ 9 件　第 2 グループ－ 43 件）、海外留学助成に 15 件の応募がありました。応募総数は 142 件と昨年度より 18 件減少しましたが、海外留学助成は 9 件増加しました。

一般研究助成と若手研究者助成は各グループ 5 名ずつの選考委員で評価を行い、COVID-19 関連一般研究助成と海外留学助成については選考委員全員で評価しました。

評価された申込書類を基に 2022 年 9 月 10 日に循環医学選考委員会を開催しました。本選考委員会は対面及びオンラインの併用会議で行いました。まず、応募された全ての書類が当財団の助成対象に該当していることを確認しました。次に各選考委員の評価が「選考要領」に則っていることを確認しました。同一施設からの複数の申込みについては、一般研究助成では 5 施設から 10 件、若手研究者助成では 4 施設から 8 件ありました。選考委員全員の賛同のもとに、それぞれの施設において評価点の高い 1 件のみを審査対象とすることにしました。第 1 グループと第 2 グループ間で評価合計点に統計上の有意差がないことを確認後、両グループを合わせて評価合計点に基づいて選考しました。COVID-19 関連一般研究助成は 2 件の応募でしたが、2 件とも研究レベルに問題がないことを再確認しました。

【交付案】

1）一般研究助成は、評価点順位の高い上位 20 名に各 100 万円を交付する。
　＜第 1 グループ－ 3 件、第 2 グループ－ 17 件＞
2）COVID-19 関連一般研究助成は 2 名に各 100 万円を交付する。
　＜第 1 グループ－ 0 件、第 2 グループ－ 2 件＞
3）若手研究者助成は、評価点順位の高い上位 10 名に各 100 万円を交付する。
　＜第 1 グループ－ 0 件、第 2 グループ－ 10 件＞
4）海外留学助成は、評価点順位 1 位、2 位の 2 名に各 500 万円を交付する。

2022 年 11 月 11 日開催の通常理事会において本交付案が承認され、2022 年度の循環医学分野助成事業の助成金交付対象者が決定しました。

本年度の選考委員会は対面及びオンラインの併用会議でしたが、意志の疎通に問題はなく活発な議論ができました。脳血管障害の応募が年々減少しております。来年度には多数の応募があることを期待します。

2022 年度　循環医学分野の助成金受領者

■第 21 回　一般研究助成　＜交付件数：20 件、助成額：2,000 万円＞

【脳血管障害及びその関連領域】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	助成額（万円）
稲垣　健志	自治医科大学医学部 解剖学講座　法医学部門	脳細動脈硬化における血管線維化機構と脳血管周囲マクロファージの役割の解明	100
古賀　政利	国立循環器病研究センター 脳血管内科　脳神経内科	頭蓋内動脈解離の疾患関連遺伝子の探求	100
宮脇　　哲	東京大学医学部 脳神経外科	Long read sequencingによるもやもや病の新規遺伝子異常の同定	100

【心疾患及びその関連領域】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	助成額（万円）
安西　　淳	慶應義塾大学医学部 循環器内科	心筋梗塞後の炎症・修復を制御する新規分子機序の解明	100
岡本　洋介	秋田大学大学院医学系研究科 細胞生理学講座	リークカリウムチャネルによる細胞骨格依存的な心房性不整脈の制御機構	100
河原崎和歌子	東京大学先端科学技術研究センター ゲノムサイエンス＆メディシン	血圧制御におけるアンジオテンシン-Wnt5aシグナルクロストークの解明	100
木岡　秀隆	大阪大学大学院医学系研究科 循環器内科学	細胞内部位特異的コシャペロンを介した心臓恒常性維持機構の解明と新規治療戦略の確立	100
絹川真太郎	九州大学大学院医学研究院 循環器内科学	心不全に合併するサルコペニアの機序の解明	100
草場　哲郎	京都府立医科大学大学院医学研究科　腎臓内科学	腎ナトリウムリン共輸送体阻害による心不全治療の試み	100
新谷　泰範	国立循環器病研究センター 分子薬理部	ラミノパチーの臓器特異性を担う分子メカニズムの解明	100
新藤　隆行	信州大学医学部 循環病態学教室	血管の恒常性制御は、癌転移抑制法となりうるか？	100
末冨　　建	山口大学 器官病態内科学	カルモジュリンキナーゼを標的とした炎症・線維化抑制による新規心不全治療薬の開発	100
田尻　和子	国立がん研究センター東病院 循環器科	自己免疫性心筋炎の発症と進展における翻訳制御因子EIF4Eの役割の検討	100
西山　功一	宮崎大学医学部 機能制御学講座 血管動態生化学分野	血管内皮－ペリサイト－血流間作用による微小血管網維持の破綻と心不全病態形成	100
野村征太郎	東京大学医学部附属病院 循環器内科	ゲノム持続可能性の理解を通した心不全の病態解明と制御	100
花谷　信介	熊本大学病院 循環器内科	新規線維化関連因子に着目したHFpEFの新規機序解明とその臨床応用	100
南　　敬	熊本大学生命資源研究支援センター　分子血管制御学	ダウン症トリソミー因子群での循環動態改善　－抗血管病に至る非線形的な分子基盤の解明	100

【心疾患及びその関連領域】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	助成額（万円）
柳沢　裕美	筑波大学 生存ダイナミクス研究センター	シングルセル・分子病理解析から紐解く大動脈解離発症機序の解明	100
吉江　幸司	信州大学医学部附属病院 循環器内科	新規心不全治療としてのTRPV1を介した心臓交感神経求心路修飾の意義	100
吉田　陽子	順天堂大学大学院医学研究科 循環器内科学/先進老化制御学講座	細胞老化を標的とした新たな心房細動の発症機序の解明と治療法の開発	100

■第 2 回 COVID-19 関連一般研究助成　＜交付件数：2 件、助成額：200 万円＞

【心疾患及びその関連領域】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	助成額（万円）
松岡　　研	大阪大学大学院医学系研究科 医化学	COVID-19関連心筋炎に対する治療薬及び予防薬の開発	100
松村光一郎	近畿大学医学部 循環器内科	COVID-19パンデミック下における心血管疾患患者の医療機関受診控えとオンライン診療の普及について	100

■第 21 回　若手研究者助成　＜交付件数：10 件、助成額：1,000 万円＞

【心疾患及びその関連領域】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	助成額（万円）
安藝　　翔	東京大学先端科学技術研究センター　ニュートリオミクス・腫瘍学分野	代謝コミュニケーションを介したミトコンドリアダイナミクスの解明	100
秋葉　庸平	慶應義塾大学医学部 循環器内科	臓器横断的な一細胞解析による血管内皮細胞を介した臓器恒常性維持機構の解明	100
池田　昌隆	九州大学医学研究院 循環器病免疫制御学講座	フェロトーシスに関する心不全の病態基盤研究	100
伊藤　淳平	大阪医科薬科大学医学部医学科 薬理学教室	心臓線維芽細胞活性化における鉄代謝の役割と線維化抑制機構の解明	100
勝海　悟郎	順天堂大学医学部・大学院医学研究科　循環器内科学講座	老化細胞除去ワクチンによる心不全治療効果の検証	100
川岸　裕幸	信州大学先鋭領域融合研究群 バイオメディカル研究所 バイオテクノロジー部門	心筋酸素消費増大を伴わない強心薬による新生児・乳児拡張型心筋症治療薬の創出	100
佐野　宗一	大阪公立大学大学院医学研究科 循環器内科学	心不全とＹ染色体についての研究	100
伯井　秀行	大阪大学大学院医学系研究科 循環器内科学	頻脈誘発性心筋症における心筋タンパク質群の恒常性維持分子メカニズムの解明	100
平池　勇雄	東京大学 保健・健康推進本部	褐色脂肪細胞が心疾患を抑制するメカニズムの理解と精密医療への展望	100
横川　哲朗	福島県立医科大学 循環器内科学講座	マクロファージの炎症制御機構に着目した肺高血圧症の新規メカニズムの解明	100

■ 2022 年度　若手研究者継続助成　＜交付件数：1 件、助成額：100 万円＞

【心疾患及びその関連領域】

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	助成額（万円）
平出　貴裕	慶應義塾大学医学部 難治性循環器疾患病態学寄付研究講座	遺伝子変異に起因する全身性難治性血管病の病態解明と新規創薬ターゲットの探索	100

■第 17 回　海外留学助成　＜交付件数：2 件、助成額：1,000 万円＞

研究者名	所　属　機　関 （留学先）	研　究　課　題	助成額 （万円）
白記　達也	大阪大学大学院医学系研究科 循環器内科学 CVPath Institute, U.S.A.	インターロイキン31シグナルによる線維性血管障害発症機序の解明	500
武井　　眞	東京都済生会 中央病院 The Adult Congenital Heart Program at Stanford, U.S.A.	Fontan循環でのPhenomappingによる病態解明	500

先進研究助成の助成選考経過

選考委員長　**安斉　俊久**

先進研究助成は疾病の治療、診断あるいは予防に対する直接的な貢献が期待される先進的、かつ臨床上有用性の高い研究に対する助成です。応募分野は年度ごとの持ち回りとしております。

2022 年度は 2 回目の循環医学分野を対象とした公募で、2022 年 4 月 1 日～ 6 月 15 日に募集しました。その結果、9 件（第 1 グループ： 脳血管障害及びその関連領域－ 6 件　第 2 グループ：心疾患及びその関連領域－ 3 件）の応募がありましたが、これは 3 年前の前回応募より 3 件少ないものでした。

循環医学分野 10 名全員の選考委員が、＜独創性＞、＜計画の妥当性＞、＜臨床的有用性＞についてガイドラインに沿った 5 段階の相対評価を行いました。なお、評価合計点は次式に基づき算出しました。

＜独創性＞の素点× 0.25 ＋＜計画の妥当性＞の素点× 0.25 ＋＜臨床的有用性＞の素点× 0.5

2022 年 9 月 10 日の循環医学分野選考委員会に先立ち、先進研究助成の選考委員会を開催しました。まず、応募された全ての申込書が当財団の助成対象に該当していることを確認しました。次に各選考委員の評価が「選考要領」に則っていることを確認しました。応募 9 件のうち、評価合計点の高い 5 件について集中的に審議することに決めました。評価点順位 1 位は脳血管領域の研究であり、臨床的有用性が非常に高いものでした。3 年前は心疾患領域の研究が受領したことも考慮し、交付対象にふさわしいと委員全員が賛同しました。

◇評価点順位 1 位に 1,000 万円を交付する。

上記の交付案を 2022 年 11 月 11 日の通常理事会において審議した結果、原案どおり可決され、2022 年度 先進研究助成事業の助成金交付対象者が決定されました。

書類評価及び選考委員会は循環医学分野の選考も兼ねていましたので大変だったと思いますが、適正にご評価、審査いただきました。お忙しいところ誠に有難うございました。

2022 年度　先進研究助成の助成金受領者

■第 6 回　先進研究助成　＜交付件数：1 件、助成額：1,000 万円＞

研究者名	所　属　機　関	研　究　課　題	助成額（万円）
猪原　匡史	国立循環器病研究センター 脳血管部門　脳神経内科	脳梗塞の発症を促進する東アジア特有の遺伝・環境要因の解明	1,000

第６回 先進医薬研究報告会

2022年12月9日(金)ザ･プリンスさくらタワー東京2Fコンファレンスフロアを配信会場として、第6回先進医薬研究報告会を開催いたしました。

2022年度もCOVID-19感染対策のため、オンライン開催とさせて頂きました。座長の西川伸一先生、先進研究助成の成果報告を頂いた小室一成先生とCOVID-19関連特別研究助成の成果報告を頂いた松下修三先生には会場にお越し頂き、理事長、常務理事、事務局メンバーがお迎えしました。また、COVID-19関連特別研究助成の成果報告を頂いた星野温先生はオンラインにて参加頂きました。

本会の開催に際し、オンラインの利点を活かし多くの先生方に開催のご案内ができました。結果、師走のお忙しい時期にも関わらず100名以上の先生方にご視聴頂きました。

本会のプログラムは、以下の構成と致しました。

開 催 日：2022年12月9日（金）　14:00 ～ 16:15
開催形式：Zoomオンライン形式
配信場所：ザ・プリンスさくらタワー東京

1. 開会の辞　14:00 ～ 14:05
2. 今年度応募状況、若手継続助成受賞者等の発表　14:05 ～ 14:20
3. 研究成果発表　14:20 ～ 16:10

座長 京都大学名誉教授　西川 伸一 先生

1) COVID-19関連特別研究報告 ①　(14:20 ～ 14:50)
『人工知能ガイド指向性進化スクリーニングによるウイルス高親和性ACE2変異体作製』
京都府立医科大学大学院医学研究科 循環器内科学　講師　星野　温 先生

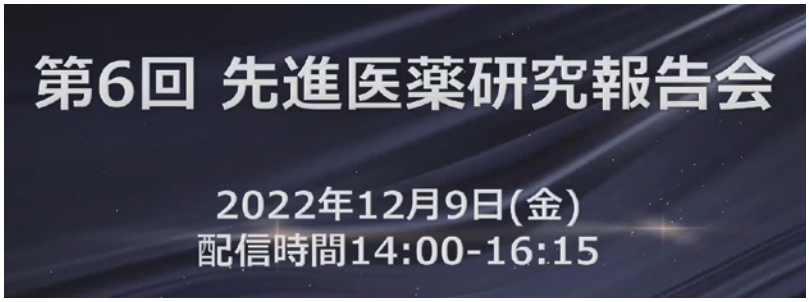
2) COVID-19関連特別研究報告 ②　(14:50 ～ 15:20)
『新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の制圧を目指したヒト中和単クローン抗体の作成』
熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究センター 臨床レトロウイルス学分野
特任教授　松下　修三 先生

休憩　(15:20 ～ 15:30)

3) 先進研究報告　(15:30 ～ 16:10)
『心不全の予後を規定する心筋DNA損傷の機能的意義の解明』
東京大学大学院医学系研究科 循環器内科学　教授　小室　一成 先生

4. 閉会の辞　16:10 ～ 16:15

林理事長より開会挨拶として、財団の沿革および 2022 年度の助成事業について紹介されました。



林　理事長 挨拶

引き続き先進研究助成および若手継続助成受賞者の発表に移りました。理事長より受賞者の氏名、所属、研究課題が紹介されました。

【第 6 回 先進研究助成】

氏　　名：猪原　匡史 先生
所　　属：国立循環器病研究センター脳血管部門 脳神経内科
研究課題：脳梗塞の発症を促進する東アジア特有の遺伝・環境要因の解明

【若手継続助成】

分　　野：精神薬療
氏　　名：北西　卓磨 先生
所　　属：東京大学大学院総合文化研究科 先進科学研究機構
研究課題：記憶情報の脳内伝達とその破綻・回復のメカニズム

分　　野 ：血液医学
氏　　名：藤原　隆行 先生
所　　属：東京大学医学部附属病院 循環器内科
研究課題：時空間的マルチスケールイメージングによる難治性循環器疾患の病態解明

分　　野：循環医学
氏　　名：平出　貴裕 先生
所　　属：慶應義塾大学医学部 難治性循環器疾患病態学寄附研究講座
研究課題：遺伝子変異に起因する全身性難治性血管病の病態解明と新規創薬ターゲットの探索

受賞者の発表に続いて研究成果報告が行われました。今回は、COVID-19 関連特別研究報告および先進研究報告ともに当財団理事の西川伸一先生（京都大学名誉教授）に座長を務めて頂きました。

まず、COVID-19 関連特別研究報告の一題目としてオンラインにて星野温先生（京都府立医科大学大学院医学研究科 循環器内科学　講師）より、『人工知能ガイド指向性進化スクリーニングに

よるウイルス高親和性 ACE2 変異体作製』についてご報告頂きました。

高親和性 ACE2 製剤は新型コロナウイルスの感染受容体である ACE2 を利用したウイルス中和タンパク質製剤で、ACE2 変異体に IgG1-Fc を結合している。モノクローナル抗体ではウイルス変異により中和活性が消失するウイルス逃避変異が問題となるが、本製剤と結合しなくなった変異ウイルスは細胞表面の ACE2 とも結合できず感染力を失うため実質問題とならない。COVID-19 ハムスターモデルおよびカニクイザルにおいて肺炎抑制効果が確認された。このように高い有効性と安全性を兼ね備えた高親和性 ACE2 製剤はウイルス逃避変異を克服する新たな治療モダリティとして期待される、というご報告でした。

座長：西川　伸一 先生

演者：星野　温 先生

次いで、研究報告会前に海外出張に行かれ、ご帰国された日に真っ直ぐ会場へお越し頂いた、松下修三先生（熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究センター 臨床レトロウイルス学分野　特任教授）に『新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の制圧を目指したヒト中和単クローン抗体の作成』のご研究を発表頂きました。松下先生におかれましては、ジェットラグの上にお疲れの処、本当にありがとうございました。

松下先生のご発表は、先行する中和抗体製剤には一定の効果が報告されているが、最も必要とされている入院が必要な中等症～重症の症例への効果が認められていない。また、500 ～ 1200 mg という高用量が用いられ、コスト面に課題を抱えている。一方、9-105 抗体は、1 mg/kg の低用量の投与で有効性が期待でき、より多くの症例に用いることが可能となる。9-105 抗体投与によって、変異株に対しても有効な状態を作り出すことができると考えられ、重症化阻止に加えて家族内感染の阻止も期待される、とのご報告でした。

座長：西川　伸一 先生

演者：松下　修三 先生

先進研究助成の成果報告として、小室一成先生（東京大学大学院医学系研究科 循環器内科学教授）に『心不全の予後を規定する心筋 DNA 損傷の機能的意義の解明』をご発表頂きました。

本研究の目的は心不全の病態を解明し新たな治療法を開発することである。本研究により、圧負荷は心筋細胞において DNA 損傷を誘導し心不全を惹起すること、DNA 損傷の程度が心不全の薬剤反応性および予後を規定していること、DNA 損傷を減らすことが心不全治療になる可能性のあることが明らかになった、と結ばれました。

座長：西川　伸一 先生

演者：小室　一成 先生

閉会の辞において、2023 年度の助成計画が発表されました。COVID-19 関連研究については、一定の役目を果たしたとの判断により助成を終えることとし、先進研究助成 1 件、3 分野各々において研究助成 31 件および海外留学助成 2 件を計画していることを公表いたしました。

最後に今年度の助成対象になられました先生方のお名前、ご所属、研究課題をエンドロールで紹介させて頂きました。

助成研究の成果

発 表 論 文

研究助成を受けられた研究者より 2022 年 4 月～ 2023 年 3 月にご報告された発表論文は次のとおりです。

氏名、所属　山崎　礼二　自治医科大学医学部 解剖学講座 組織学部門
助成区分　第 21 回　精神薬療分野　海外留学助成
研究課題　脱髄性疾患や発達障害における脳内クレアチン代謝の役割
論　文　Pharmacological treatment promoting remyelination enhances motor function after internal capsule demyelination in mice
Yamazaki R, Osanai Y, Kouki T, Huang JK, Ohno N
Neurochem Int. 2023 Mar;164:105505. doi: 10.1016/j.neuint.2023.105505.

氏名、所属　吉池　卓也　国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 睡眠・覚醒障害研究部
助成区分　第 51 回　精神薬療分野　一般研究助成
研究課題　構造・機能的神経可塑性の概日ダイナミクスが抗うつ治療反応に果たす役割
論　文　Depressive cognitive style relates to an individual trait of time perception in bipolar depression: A preliminary study
Yoshiike T, Melloni EMT, Dallaspezia S, Yamada N, Kuriyama K, Benedetti F
Journal of Affective Disorders Reports 9 (2022) 100363

氏名、所属　久島　周　名古屋大学医学部附属病院 ゲノム医療センター

助成区分　第 53 回　精神薬療分野　一般研究助成

研究課題　精神疾患の発症に関与するノンコーディング RNA の同定

論　文

1）Variable psychiatric manifestations in patients with 16p11.2 duplication: a case series of 4 patients
Hayashi Y, Kushima I, Aleksic B, Senaha T, Ozaki N
Psychiatry Clin Neurosci. 2022 Mar;76(3):86-88. doi: 10.1111/pcn.13324.

2）Case report of a female with bipolar disorder and *MBD5* deletion
Kushima I, Lo T, Aleksic B, Ozaki N
Psychiatry Clin Neurosci. 2022 Apr;76(4):127-128. doi: 10.1111/pcn.13329.

3）Treatment-resistant schizophrenia in patients with 3q29 deletion: A case series of four patients
Nawa Y, Kushima I, Aleksic B, Yamamoto M, Kimura H, Banno M, Hashimoto R, Ozaki N
Psychiatry Clin Neurosci . 2022 Jul;76(7):338-339. doi: 10.1111/pcn.13361.

4）Psychiatric patients with a *de novo* 17q12 deletion: Two case reports
Kushima I, Uematsu M, Ishizuka K, Aleksic B, Ozaki N
Psychiatry Clin Neurosci . 2022 Jul;76(7):345-347. doi: 10.1111/pcn.13367.

5）Cross-Disorder Analysis of Genic and Regulatory Copy Number Variations in Bipolar Disorder,Schizophrenia, and Autism Spectrum Disorder
Kushima I, Nakatochi M, Aleksic B, Okada T, Kimura H, Kato H, Morikawa M, Inada T, Ishizuka K, Torii Y, Nakamura Y, Tanaka S, Imaeda M, Takahashi N, Yamamoto M, Iwamoto K, Nawa Y, Ogawa N, Iritani S, Hayashi Y, Lo T, Otgonbayar G, Furuta S, Iwata N, Ikeda M, Saito T, Ninomiya K, Okochi T, Hashimoto R, Yamamori H, Yasuda Y, Fujimoto M, Miura K, Itokawa M, Arai M, Miyashita M, Toriumi K, Ohi K, Shioiri T, Kitaichi K, Someya T, Watanabe Y, Egawa J, Takahashi T, Suzuki M, Sasaki T, Tochigi M, Nishimura F, Yamasue H, Kuwabara H, Wakuda T, Kato TA, Kanba S, Horikawa H, Usami M, Kodaira M, Watanabe K, Yoshikawa T, Toyota T, Yokoyama S, Munesue T, Kimura R, Funabiki Y, Kosaka H, Jung M, Kasai K, Ikegame T, Jinde S, Numata S, Kinoshita M, Kato T, Kakiuchi C, Yamakawa K, Suzuki T, Hashimoto N, Ishikawa S, Yamagata B, Nio S, Murai T, Son S, Kunii Y, Yabe H, Inagaki M, Goto Y, Okumura Y, Ito T, Arioka Y, Mori D, Ozaki N
Biol Psychiatry. 2022 Sep 1;92(5):362-374. doi: 10.1016/j.biopsych.2022.04.003.

6）Contribution of copy number variations to the risk of severe eating disorders
Kushima I, Imaeda M, Tanaka S, Kato H, Oya-Ito T, Nakatochi M, Aleksic B, Ozaki N
Psychiatry Clin Neurosci. 2022 Sep;76(9):423-428. doi: 10.1111/pcn.13430.

氏名、所属　橋本　謙二　千葉大学社会精神保健教育研究センター 病態解析研究部門
助成区分　第 54 回　精神薬療分野　一般研究助成
研究課題　ケタミンの持続抗うつ効果の機序解明に関する研究
論　文
1）Nuclear factor of activated T cells 4 in the prefrontal cortex is required for prophylactic actions of (*R*)-ketamine
Ma L, Zhang J, Fujita Y, Qu Y, Shan J, Wan X , Wang X , Ishima T , Kobayashi K , Wang L, Hashimoto K
Transl Psychiatry. 2022 Jan 21;12(1):27. doi: 10.1038/s41398-022-01803-6.
2）The role of hippocampal KCNQ2 channel in antidepressant actions of ketamine
Ma L, Hashimoto K
Neuron. 2022 Jul 20;110(14):2201-2203. doi: 10.1016/j.neuron.2022.05.027.
3）A key role of miR-132-5p in the prefrontal cortex for persistent prophylactic actions of (*R*)-ketamine in mice
Ma L, Wang L, Chang L, Shan J, Qu Y, Wang X, Wan X, Fujita Y, Hashimoto K
Transl Psychiatry. 2022 Sep 28;12(1):417. doi: 10.1038/s41398-022-02192-6.
4）A role of microRNA-149 in the prefrontal cortex for prophylactic actions of (*R*)-ketamine in inflammation model
Ma L, Wang L, Chang L, Shan J, Qu Y, Wang X, Fujita Y, Hashimoto K
Neuropharmacology. 2022 Nov 15;219:109250. doi: 10.1016/j.neuropharm.2022.109250.

氏名、所属　近藤　誠　大阪公立大学大学院医学研究科 脳神経機能形態学
助成区分　第 15 回　精神薬療分野　若手研究者助成
研究課題　治療抵抗性うつ病に対する新規治療薬の開発
論　文
IGF-1 release in the medial prefrontal cortex mediates the rapid and sustained antidepressant-like actions of ketamine
Deyama S, Kondo M, Shimada S, Kaneda K
Transl Psychiatry. 2022 May 17;12(1):178. doi: 10.1038/s41398-022-01943-9.

氏名、所属　山西　恭輔　兵庫医科大学医学部 精神科神経科学講座
助成区分　第 15 回　精神薬療分野　若手研究者助成
研究課題　インフラマソームを中心とした末梢炎症がうつ病を引き起こす機序解明と新規治療戦略の模索
論　文
Acute stress induces severe neural inflammation and overactivation of glucocorticoid signaling in interleukin-18-deficient mice
Yamanishi K, Doe N, Mukai K, Hashimoto T, Gamachi N, Hata M, Watanabe Y, Yamanishi C, Yagi H, Okamura H, Matsunaga H
Transl Psychiatry. 2022 Sep 23;12(1):404. doi: 10.1038/s41398-022-02175-7.

氏名、所属　吉永　怜史　東京慈恵会医科大学医学部 解剖学講座
助成区分　第 15 回　精神薬療分野　若手研究者助成
研究課題　死後脳空間的遺伝子発現解析に基づく動物モデル作成による精神疾患病態解明
論　文　*Dab1*-deficient deep layer neurons prevent *Dab1*-deficient superficial layer neurons from entering the cortical plate
Yoshinaga S, Honda T, Kubo K, Nakajima K
Neurosci Res. 2022 Jul;180:23-35. doi: 10.1016/j.neures.2022.03.011.

氏名、所属　加瀬　義高　慶應義塾大学医学部 生理学教室
助成区分　第 1 回　精神薬療分野　COVID-19 関連一般研究助成
研究課題　COVID-19 関連中枢神経障害に対する治療薬の開発研究
論　文　The original strain of SARS-CoV-2, the Delta variant, and the Omicron variant infect microglia efficiently, in contrast to their inability to infect neurons: Analysis using 2D and 3D cultures
Kase Y, Sonn I, Goto M, Murakami R, Sato T, Okano H
Exp Neurol. 2023 May;363:114379. doi: 10.1016/j.expneurol.2023.114379.

氏名、所属　今井　孝　埼玉医科大学医学部 微生物学
助成区分　第 37 回　血液医学分野　一般研究助成
研究課題　マラリア原虫寄生赤芽球の生物学的意義
論　文
1) Fluctuations of Spleen Cytokine and Blood Lactate, Importance of Cellular Immunity in Host Defense Against Blood Stage Malaria *Plasmodium yoelii*
Imai T, Suzue K, Ngo-Thanh H, Ono S, Orita W, Suzuki H, Shimokawa C, Olia A, Obi S, Taniguchi T, Ishida H, Kaer LV, Murata S, Tanaka K, Hisaeda H
Front Immunol. 2019 Sep 25;10:2207. doi: 10.3389/fimmu.2019.02207. eCollection 2019.
2) Blood–cerebrospinal fluid barrier: another site disrupted during experimental cerebral malaria aused by *Plasmodium berghei* ANKA
Ngo-Thanh H, Sasaki T, Suzue K, Yokoo H, Isoda K, Kamitani W, Shimokawa C, Hisaeda H, Imai T
Int J Parasitol. 2020 Dec;50(14):1167-1175. doi: 10.1016/j.ijpara.2020.07.007.

氏名、所属　田中　繁　千葉大学医学部附属病院 アレルギー・膠原病内科
助成区分　第 22 回　血液医学分野　若手研究者助成
研究課題　上皮由来サイトカイン TSLP による腸管制御性 T 細胞の成熟機構の解明
論　文　Epithelial cell-derived cytokine TSLP activates regulatory T cells by enhancing fatty acid uptake
Kasuya T, Tanaka S, Tamura J, Etori K, Shoda J, Hattori K, Endo Y, Kitajima M, Kageyama T, Iwamoto T, Yokota M, Iwata A, Suto A, Suzuki K, Suzuki H, Ziegler SF, Nakajima H
Sci Rep. 2023 Jan 30;13(1):1653. doi: 10.1038/s41598-023-28987-1.

氏名、所属　荒木　真理人　順天堂大学大学院医学研究科 骨髄増殖性腫瘍治療薬開発講座
助成区分　第 40 回　血液医学分野　一般研究助成
研究課題　腫瘍性リガンド変異型 CALR の切断メカニズムの解明
論　文　A marine sponge-derived lectin reveals hidden pathway for thrombopoietin receptor activation
Watari H, Kageyama H, Masubuchi N, Nakajima H, Onodera K, Focia PJ, Oshiro T, Matsui T, Kodera Y, Ogawa T, Yokoyama T, Hirayama M, Hori K, Freymann DM, Imai M, Komatsu N, Araki M, Tanaka Y, Sakai R
Nat Commun. 2022 Nov 25;13(1):7262. doi: 10.1038/s41467-022-34921-2.

氏名、所属　江本　拓央　神戸大学大学院医学研究科 内科学講座 循環器内科学分野
助成区分　第 11 回　循環医学分野　海外留学助成
研究課題　動脈硬化におけるマクロファージ増殖制御機構の解明
論　文　Colony stimulating factor-1 producing endothelial cells and mesenchymal stromal cells maintain monocytes within a perivascular bone marrow niche
Emoto T, Lu J, Sivasubramaniyam T, Maan H, Khan AB, Abow AA, Schroer SA, Hyduk SJ, Althagafi MG, McKee TD, Fu F, Shabro S, Ulndreaj A, Chiu F, Paneda E, Pacheco S, Wang T, Li A, Jiang JX, Libby P, Husain M, Wang B, Rubin BB, Cybulsky MI, Robbins CS
Immunity. 2022 May 10;55(5):862-878.e8. doi: 10.1016/j.immuni.2022.04.005.

氏名、所属　猪原　匡史　国立循環器病研究センター 脳血管部門 脳神経内科
助成区分　第 17 回　循環医学分野　一般研究助成
研究課題　脳梗塞の新規感受性遺伝子多型の日欧比較と当該多型が規定する脳梗塞の予後調査研究
論　文　Impact of the *RNF213* p.R4810K Variant on Endovascular Therapy for Large-Vessel Occlusion Stroke
Yoshimoto T, Tanaka K, Koge J, Saito S, Yamagami H, Nakaoku Y, Ogata S, Nishimura K, Yamaguchi E, Chiba T, Kawakami D, Shiozawa M, Kamogawa N, Ohta T, Satow T, Inoue M, Hattori Y, Washida K, Kataoka H, Chung JW, Bang OY, Toyoda K, Koga M, Maruyama H, Ihara M
Stroke Vasc Interv Neurol. 2022;2:e000396. doi: 10.1161/SVIN.122.000396

氏名、所属　河野　浩之　　杏林大学医学部 脳卒中医学
助成区分　第 19 回　循環医学分野　一般研究助成
研究課題　急性期脳梗塞に出現した「ゴースト虚血コア」の正体を明らかにする
論　　文　Correlation between pretreatment and follow-up infarct volume using CT perfusion imaging: the Bayesian versus singular value decomposition method
Kawano H, Adachi T, Saito M, Amano T, Gomyo M, Yokoyama K, Shiokawa Y, Hirano T
Neurol Sci. 2023 Jun;44(6):2041-2047. doi: 10.1007/s10072-023-06627-w.

氏名、所属　星野　温　　京都府立医科大学 循環器内科学
助成区分　COVID-19 関連特別研究助成
研究課題　人工知能ガイド指向性進化スクリーニングによるウイルス高親和性 ACE2 変異体創作
論　　文　1）Engineered ACE2 receptor therapy overcomes mutational escape of SARS-CoV-2
Higuchi Y, Suzuki T, Arimori T, Ikemura N, Mihara E, Kirita Y, Ohgitani E, Mazda O, Motooka D, Nakamura S, Sakai Y, Itoh Y, Sugihara F, Matsuura Y, Matoba S, Okamoto T, Takagi J, Hoshino A
Nat Commun. 2021 Jun 21;12(1):3802. doi: 10.1038/s41467-021-24013-y.
2）An engineered ACE2 decoy neutralizes the SARS-CoV-2 Omicron variant and confers protection against infection in vivo
Ikemura N, Taminishi S, Inaba T, Arimori T, Motooka D, Katoh K, Kirita Y, Higuchi Y, Li S, Suzuki T, Itoh Y, Ozaki Y, Nakamura S, Matoba S, Standley DM, Okamoto T, Takagi J, Hoshino A
Sci Transl Med. 2022 Jun 22;14(650):eabn7737. doi: 10.1126/scitranslmed.abn7737.

氏名、所属　松下　修三　　熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究センター 臨床レトロウイルス学分野
助成区分　COVID-19 関連特別研究助成
研究課題　新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）を中和するヒト単クローン抗体の作成
論　　文　Resistance of SARS-CoV-2 variants to neutralization by antibodies induced in convalescent patients with COVID-19
Kaku Y, Kuwata T, Zahid HM, Hashiguchi T, Noda T, Kuramoto N, Biswas S, Matsumoto K, Shimizu M, Kawanami Y, Shimura K, Onishi C, Muramoto Y, Suzuki T, Sasaki J, Nagasaki Y, Minami R, Motozono C, Toyoda M, Takahashi H, Kishi H, Fujii K, Tatsuke T, Ikeda T, Maeda Y, Ueno T, Koyanagi Y, Iwagoe H, Matsushita S
Cell Rep. 2021 Jul 13;36(2):109385. doi: 10.1016/j.celrep.2021.109385.

氏名、所属　白石　学　　自治医科大学 総合医学第 2 講座 心臓血管外科
助成区分　第 20 回　循環医学分野　一般研究助成
研究課題　心筋梗塞に対する骨髄由来 M2 マクロファージ の心嚢内移植療法の開発
論　　文　Nrg1/ErbB signaling-mediated regulation of fibrosis after myocardial infarction
Shiraishi M, Yamaguchi A, Suzuki K
FASEB J. 2022 Feb;36(2):e22150. doi: 10.1096/fj.202101428RR.

氏名、所属　湯浅　慎介　　慶應義塾大学医学部 循環器内科
助成区分　第 20 回　循環医学分野　一般研究助成
研究課題　機械学習を用いた循環器疾患創薬基盤技術の開発
論　　文　The complement C3-complement factor D-C3a receptor signalling axis regulates cardiac remodelling in right ventricular failure
Ito S, Hashimoto H, Yamakawa H, Kusumoto D, Akiba Y, Nakamura T, Momoi M, Komuro J, Katsuki T, Kimura M, Kishino Y, Kashimura S, Kunitomi A, Lachmann M, Shimojima M, Yozu G, Motoda C, Seki T, Yamamoto T, Shinya Y, Hiraide T, Kataoka M, Kawakami T, Suzuki K, Ito K, Yada H, Abe M, Osaka M, Tsuru H, Yoshida M, Sakimura K, Fukumoto Y, Yuzaki M, Fukuda K, Yuasa S
Nat Commun. 2022 Sep 15;13(1):5409. doi: 10.1038/s41467-022-33152-9.

氏名、所属　髙田　卓磨　　東京女子医科大学 臨床医学系 循環器内科学
助成区分　第 20 回　循環医学分野　若手研究者助成
研究課題　心不全の病態解明を目指した配向制御に伴う心筋細胞同期的収縮制御機構の解明
論　　文　Aligned human induced pluripotent stem cell-derived cardiac tissue improves contractile properties through promoting unidirectional and synchronous cardiomyocyte contraction
Takada T, Sasaki D, Matsuura K, Miura K, Sakamoto S, Goto H, Ohya T, Iida T, Homma J, Shimizu T, Hagiwara N
Biomaterials. 2022 Feb;281:121351. doi: 10.1016/j.biomaterials.2021.121351.

氏名、所属　樋口　雄亮　　京都府立医科大学 循環器内科学
助成区分　第 20 回　循環医学分野　若手研究者助成
研究課題　CRISPR ライブラリを用いた新規マイトファジー制御因子の発見と心不全治療への応用
論　　文　1）Engineered ACE2 receptor therapy overcomes mutational escape of SARS-CoV-2
Higuchi Y, Suzuki T, Arimori T, Ikemura N, Mihara E, Kirita Y, Ohgitani E, Mazda O, Motooka D, Nakamura S, Sakai Y, Itoh Y, Sugihara F, Matsuura Y, Matoba S, Okamoto T, Takagi J, Hoshino A
Nat Commun. 2021 Jun 21;12(1):3802. doi: 10.1038/s41467-021-24013-y.
2）An engineered ACE2 decoy neutralizes the SARS-CoV-2 Omicron variant and confers protection against infection in vivo
Ikemura N, Taminishi S, Inaba T, Arimori T, Motooka D, Katoh K, Kirita Y, Higuchi Y, Li S, Suzuki T, Itoh Y, Ozaki Y, Nakamura S, Matoba S, Standley DM, Okamoto T, Takagi J, Hoshino A
Sci Transl Med. 2022 Jun 22;14(650):eabn7737. doi: 10.1126/scitranslmed.abn7737.

氏名、所属　池村　奈利子　京都府立医科大学 循環器内科学

助成区分　第1回　循環医学分野　COVID-19 関連一般研究助成

研究課題　高親和性 ACE2 キメラ抗体分泌間葉系幹細胞による COVID-19 細胞療法の開発

論　文

1）Engineered ACE2 receptor therapy overcomes mutational escape of SARS-CoV-2
Higuchi Y, Suzuki T, Arimori T, Ikemura N, Mihara E, Kirita Y, Ohgitani E, Mazda O, Motooka D, Nakamura S, Sakai Y, Itoh Y, Sugihara F, Matsuura Y, Matoba S, Okamoto T, Takagi J, Hoshino A
Nat Commun. 2021 Jun 21;12(1):3802. doi: 10.1038/s41467-021-24013-y.

2）An engineered ACE2 decoy neutralizes the SARS-CoV-2 Omicron variant and confers protection against infection in vivo
Ikemura N, Taminishi S, Inaba T, Arimori T, Motooka D, Katoh K, Kirita Y, Higuchi Y, Li S, Suzuki T, Itoh Y, Ozaki Y, Nakamura S, Matoba S, Standley DM, Okamoto T, Takagi J, Hoshino A
Sci Transl Med. 2022 Jun 22;14(650):eabn7737. doi: 10.1126/scitranslmed.abn7737.

☆☆ 助成金受領者へのお願い ☆☆
対象研究に関し発表される場合には、必ず“公益財団法人 先進医薬研究振興財団（英文の場合は、SENSHIN Medical Research Foundation）の助成による”旨を書き添えていただくと共に、別刷を本財団にご提供下さい。

2022 年度（第 6 回）若手研究者継続助成 選考経過報告

若手研究者継続助成の選考は、昨年に引き続きビデオ審査とさせていただきました。各分野 10 名の選考委員と分科会委員長（理事）の計 33 名により、「研究の達成度」および「次年度への発展性」の 2 項目について 5 段階で評価いただきました。

研究成果報告を発表いただく 30 名の若手研究者助成の先生方には、ビデオ作成というお手数をお掛け致しました。

ビデオ審査の評価点を集計し、評価合計点が一番高い各分野の若手研究者 3 名を継続助成の交付対象者として、理事より構成される審査委員会（審査委員長　林理事長）にて、交付が決定され、12 月 9 日の第 6 回先進医薬研究報告会の授賞式で林理事長より発表されました。

若手研究者継続助成者には、1 年間、100 万円の研究助成金が贈られます。

【精神薬療分野】
東京大学大学院総合文化研究科 先進科学研究機構　北西　卓磨 先生
《研究課題》：記憶情報の脳内伝達とその破綻・回復のメカニズム

【血液医学分野】
東京大学医学部附属病院 循環器内科　藤原　隆行 先生
《研究課題》：時空間的マルチスケールイメージングによる難治性循環器疾患の病態解明

【循環医学分野】
慶應義塾大学医学部 難治性循環器疾患病態学寄附研究講座　平出　貴裕 先生
《研究課題》：遺伝子変異に起因する全身性難治性血管病の病態解明と新規創薬ターゲットの探索

記念品贈呈式

2023 年 6 月 2 日開催の第 13 回定時評議員会の終結時をもって、理事 6 名（加藤進昌先生、小山司先生、島本和明先生、鈴木宏治先生、幕内雅敏先生、三國雅彦先生）、評議員 3 名（小林祥泰先生、坂田洋一先生、山田和雄先生）、監事 1 名（濱田宇一先生）が任期満了により退任となりました。退任の先生方には長きにわたり当財団の活動、発展に多大なご尽力を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

同日開催された第 25 回臨時理事会において、定款第 53 条（名誉理事）に基づき、加藤進昌先生、小山司先生、島本和明先生、鈴木宏治先生、幕内雅敏先生、三國雅彦先生の名誉理事選任が承認、可決されました。

臨時理事会終了後にグランドプリンスホテル高輪 貴賓館にて記念品贈呈式を執り行いました。まず事務局より当財団の沿革を説明しました。次に各先生の財団でのご略歴を紹介し、林理事長より記念品が贈呈されました。記念品贈呈後の各先生のスピーチでは、「若い時代に貴重な助成金をいただき研究を遂行することができた」、「研究報告会で発表の場をいただくとともに他の研究者との交流ができ、研究の幅が広がった」、「選考委員や役員となって異なる分野の研究に触れることができ勉強になった」、「財団の運営に携わることができ楽しかった」、「財団を通じて個人的なつながりが得られたことは有難かった」等のお言葉を頂戴しました。また、各先生は口々に若手研究者への支援を積極的に進め、若手の育成に貢献していってほしいと述べられました。

なお、会場ご欠席の名誉理事、退任評議員の先生方には郵送にて記念品を送付させていただきました。

加藤　進昌 先生、林　義治 理事長

加藤　進昌 先生

小山　司 先生、林　義治 理事長

小山　司 先生

島本　和明 先生、林　義治 理事長

島本　和明 先生

鈴木　宏治 先生、林　義治 理事長

鈴木　宏治 先生

三國　雅彦 先生、林　義治 理事長

三國　雅彦 先生

濱田　宇一 先生、林　義治 理事長

濱田　宇一 先生

海外留学だより

海外留学助成を受けられた研究者のうち、本年度に海外留学だよりを送付頂きました方々は、次のとおりです。

■ 精神薬療海外留学助成

第 25 回（2021 年度）

代田　惇朗　　埼玉県立小児医療センター 神経科
留学先：Division of Pediatric Neurology David Geffen School of Medicine at UCLA, U.S.A.

林　　若穂　　昭和大学附属烏山病院
留学先：Social, Genetic, and Developmental Psychiatry Centre, Institute of Psychiatry, Psychology, and Neuroscience, King's College London U.K.

■ 血液医学海外留学助成

第 38 回（2020 年度）

三浦　宏平　　新潟大学医歯学総合研究科 消化器・一般外科学分野
留学先：University Clinical Hospital Murcia Virgen de la Arrixaca, Spain

第 39 回（2021 年度）

川島　　希　　名古屋大学医学部附属病院 小児科
留学先：Department of Cancer Biology, Cleveland Clinic Lerner Research Institute, U.S.A.

■ 循環医学海外留学助成

第 16 回（2021 年度）

岡田　　厚　　国立循環器病研究センター 心臓血管内科
留学先：Minneapolis Heart Institute Foundation, U.S.A.

藤原　健史　　自治医科大学 内科学講座 循環器内科学部門
留学先：Nuffield Department of Primary Care Health Sciences, University of Oxford, U.K.

ロサンゼルス留学記

代田惇朗
埼玉県立小児医療センター 神経科
留学先：Division of Pediatric Neurology David Geffen School of Medicine at UCLA, U.S.A.

私は2022年8月からUniversity of California, Los Angeles（UCLA）の小児神経科で成相宏樹先生の指導のもとで留学を開始しております。当初は2022年4月からの予定でしたが、ビザの手続きに必要なDS-2019の発行に問題が生じ、遅延がありました。渡米直前の3月になってビザの手続きが一時停止するという連絡を受けましたが、幸いにもUCLAの成相先生やRaman Sankar教授のご支援により、2022年8月に渡米することができました。ビザが発行されるのを待っている期間中も成相先生からの助言をいただき、脳波シグナル処理やディープラーニングなどの研究に必要な準備をする有意義な時間を過ごすことができました。

UCLAの小児神経科は、てんかんの診療だけでなく研究面でも優れた施設であり、成人の神経内科やてんかん外科、放射線科などとの連携により難治性てんかんの外科的治療が行われています。先生方との直接の対面やコミュニケーションを楽しみにしていましたが、勤務を開始するとほとんどの会議がオンラインで行われることに驚きました。パンデミックの影響により、会議形式が大きく変化し、上級医の先生方も外来診療をオンラインで行う頻度が増え、病院への出勤頻度が減少したようでした。臨床や研究の会議でも他のメンバーとの対話機会が限られたため、英語で積極的に発言や質問をし、コミュニケーションを図る努力をしました。必要な場合は、回診の日などに直接先生方に会いに行く必要がありました。お会いするとどの先生方も非常に親切で少しずつ交流を深めることができました。

私の留学目的は、脳波シグナル処理とディープラーニングを組み合わせて、乳児期の難治性てんかんの代表的なバイオマーカーを探索することです。UCLAの小児神経科では、成相先生やShaun Hussain先生を中心に、点頭てんかんや難治性てんかんの頭皮上脳波や頭蓋内脳波に関する研究が行われてきました。成相先生直属のラボは正に立ち上がったばかりで、成相先生と、私と同じく留学でいらっしゃった東京医科大学小児科の小穴信吾先生と日々議論しながら元々始まっていたプロジェクトの推進と、新しいプロジェクトを開始できるよう励んでおります。私にとって最も新鮮だったのはディープラーニングなどの高度な解析手法が高度化しているため、工学部の大学院生と教授陣とのコラボレーションも活発であることでした。特に工学部の大学院生には日々教えを乞いながら様々なプロジェクトを進めることが出来ています。

特に感銘を受けたプロジェクトの一つは、脳深部に存在する視床の脳波研究です。UCLAでは最近、難治性てんかんの患者に対する応答性神経刺激療法が推進されており、視床の脳波活動を記録しています。視床はてんかん発作の広がりに関与する重要な領域ですが、人間のデータはほとんど記録されていませんでした。現在は治療の一環として記録された脳深部の脳波活動を解析し、てんかんの理解と治療効果のバイオマーカーの発見を目指して研究を続けています。他にも視床脳波の睡眠時の活動を解析や神経発達症の頭皮上脳波など様々なプロジェクトに参加させていただけており、UCLAのもつデータの数に日々圧倒されながら充実した研究生活を送れています。

ロサンゼルスは人口約380万人の大都市であり、気候も恵まれています。さまざまな人種の人々が暮らし、歩いていると英語だけでなく、さまざまなアジア圏の言葉でも話しかけられることもあります。私は妻と共に留学しており、留学生の中には子供を連れている人も多く、日本人コミュニティも活発で

す。ロサンゼルス市内の観光名所だけでなく、州立公園や国立公園も車でアクセスできる範囲にあり、休日にはハイキングに出かけることもあります。また、スポーツ観戦も楽しんでいます。大谷翔平選手が所属するロサンゼルス・エンジェルス（アナハイム）の野球観戦や、八村塁選手が所属するロサンゼルス・レイカーズのバスケットボール、大学時代に行っていたアイスホッケー（ロサンゼルス・キングス）の試合観戦にも何度か足を運びました。ロサンゼルスはこのように大変過ごしやすい街ですが、生活におけるデメリットを挙げるとすると住居の料金が他の地域と比較すると高額（1 ベッドルームで月額 2500 − 3000 ドル程度）であることだと思います。しかしながら、ロサンゼルスはそのデメリットを上回る多様な人種の人々が暮らす雑多で、のんびりとした暖かい雰囲気があります。私が予想していたよりもはるかに馴染みやすく、留学生にとって過ごしやすい街だと感じました。

最後に、再度先進医薬研究振興財団の海外留学助成を受けたことに感謝申し上げます。今後も日本で継続・発展できる研究や、米国でしかできない研究に取り組みながら、日々精進していく所存です。

〔原稿受領：2023 年 5 月〕

UCLA のキャンパス

英国の成人期 ADHD 診療と研究について

林　若穂
昭和大学附属烏山病院
留学先：Social, Genetic, and Developmental Psychiatry Centre, Institute of Psychiatry, Psychology, and Neuroscience, King's College London U.K.

【はじめに】

新型コロナウィルスパンデミックに続き、ロシアのウクライナ侵攻により英国ビザがなかなか届かず、果たして無事に留学ができるのだろうかと不安に思っていた日々からもうすぐ一年が経とうとしています。ロンドンではマスクをしている人はほとんど見かけず、コロナの話題がニュースになることもなくなっていますが、コロナ禍で進んだオンライン診療システムがすっかり定着し、精神科の外来診療も患者さんの希望に合わせて数多くオンラインで行われています。患者さんの部屋や自宅の様子を垣間見れるというメリットも実感しますが、face-to-face の診療で得られる rapport の形成や non-verbal な情報の大切さにも改めて気付かされます。日英で、Attention Deficit Hyperactivity Disorder（ADHD）の専門診療および研究活動を行うことで、様々な違いや、国を超えても同様の問題を抱えていることなど、本当に多くの発見と学びがある毎日です。

【臨床現場】

私が研究と共に臨床活動を行っている Adult ADHD and Autism Service, South London and Maudsley NHS Foundation Trust は、Camberwell にある Maudsley Hospital と Beckenham にある Bethlem Royal Hospital が基幹病院となっており、local および national level で成人期発達障害の専門診療を提供しています。日本での診療と比較して一つの違いと感じるのは、人種、文化、宗教、教育を受けた国・環境などが全く異なる多種多様な背景をもつ患者さんと向きあい、症状の評価をするという難しさです。ADHD の症状の一つをとっても、「私の育った国では学校でみんなおしゃべりしているから、おしゃべりで怒られたことはないね」「学校には全く行ってなかったからね、家では親も走り回ってたよ」と幼少期の相対的な症状評価が難しいことも少なくありません。このため、日本に比べて一人一人の患者さんの面接時間は 2 ～ 3 倍と長く、Diagnostic Interview for ADHD in Adults や Autism Diagnostic Interview-Revised などのプレアセスメントもしっかり行い、時間をかけて診断をするシステムが構築されています。幼少期の養育環境や文化的な背景を理解し、現存の診断基準と丁寧に照らし合わせた、数ページにわたる詳細な診断レポートを作成するため、一人のケースをより丁寧に検討できるという感覚があります。一方、ADHD の専門外来を受診するには、患者さんは 1 年半近く待たなければならず、さらに併存症の治療も GP（General Practioner）や他の専門外来を受診してもらわないと進まず、一人の医師が ADHD と併存症の治療を同時にできないというもどかしい側面もあります。処方できる ADHD 薬にも大きな差があり、日本で唯一認可されている（成人）メチルフェニデート塩酸塩徐放錠以外にも、短時間作用型のメチルフェニデートやリスデキサンフェタミンメシル酸塩などが中枢神経刺激薬として処方でき、治療の選択肢が広いといえます。しかし、日本は唯一グアンファシンが成人に適応となっており、日本での臨床研究データが英国でも注目されています。日英それぞれのメリットを活かしたより良い診療体制について検討を重ねられたら良いと思っています。

【研究活動】

私の所属する Social, Genetic, and Developmental Psychiatry Centre, Institute of Psychiatry,

Psychology, and Neuroscience, King's College London は、先の Maudsley Hospital のすぐ隣に位置し、国内外から研究者が集まり、様々な神経精神分野の研究が行われています。毎週 weekly seminer といってセンターに所属する研究者が、研究内容や成果の発表を順に行い、意見交換をする時間があります。最先端の異なる分野の研究内容を学び、自分の研究に対してもアドバイスがもらえる非常に良い研究環境といえます。また、患者さんや研究対象者を積極的に研究活動の一員として迎え入れるという意識が浸透しています。これは、多くの研究で focus group という形で行われており、研究対象となる患者さんや当事者からのニーズを調査し、研究に対する直接的な意見をもらうという作業です。当事者を募って研究計画を説明し、研究で聴取する内容が適切か、不快でないか、研究期間は長すぎないか、使用するデバイスがある際は、その使いやすさはどうか、さらに研究がどのように当事者に利益をもたらしうるか、といったことを議論します。これまで患者さんがどのような研究や事象の解明を求めているのか、どのように還元して欲しいと思うのかを意識的にきく機会はあまりなかったため、自分が思ってもいなかった困難や当事者が気にしていることを知ることができ、新たな研究テーマの発見にも繋がり、非常に有益なプロセスとなっています。患者さんや当事者も、お互いに疑問や問題を共感・共有し、医療研究の一員であるという意識を高めることができるため、治療的なファクターもあると感じます。健康的な研究環境には欠かせない作業であり、日本の臨床研究の場にも積極的に取り入れていけたら良いと考えています。

【おわりに】

専門分野において、日英の比較をしつつ研究および臨床経験を積めることができ、とても嬉しく思います。このような貴重な留学経験をご支援いただきました先進医薬研究振興財団の皆様ならびに関係者の皆様、昭和大学、昭和大学医学部精神医学講座の皆様に深く感謝申し上げます。

〔原稿受領：2023 年 5 月〕

The Maudsley Hospital 前にて

スペインで外科を学ぶ

三浦宏平
新潟大学医歯学総合研究科 消化器・一般外科学分野
留学先：University Clinical Hospital Murcia Virgen de la Arrixaca, Spain

2022年4月よりスペインのムルシア州にあるムルシア大学付属ビルヘンアリサカ病院、消化器・一般・移植外科に留学しております。今回、留学だよりとして海外を目指す先生方に向けて、私の経験をご紹介したいと思います。

【留学先の選び方について】

スペインは私の専門である臓器移植のメッカであること、以前からスペインの歴史や文化に興味があったことが留学の動機となりました。私の場合、自分の研究目的にあった施設を論文などから検索して10カ所ほどに絞り、各施設2-3人に留学したい旨のメールを送りました。数十通送ったメールのうち返信がきたのはわずか2通でしたが、そのうちの一つが現在の留学先となりました。

【留学準備について】

パンデミックの影響もあり、留学の意思を医局に伝えてから実際の渡航までに2年間かかりました。最初の1年で助成金申請、専門医取得、研究のまとめ、残りの1年で業務の引継ぎ、VISA申請、身辺整理を行いました。出国が予定より遅れましたが、その分時間をかけて準備ができました。留学開始後すぐに生活できるよう、事前に留学先の若手医師を紹介してもらい、アパート探しやVISA手続きを遠隔で手伝ってもらいました。

【留学開始後の日常生活】

平日は水曜日を語学レッスンの日に定め、それ以外の4日間を通常勤務としています。私は日本の医師免許しか持っておりませんが、教授公認のフェローとして肝臓チームに配属され、患者さんの治療に参加しています。8時には病棟に到着しチームに合流します。チーム回診のあとは8時半から症例検討会、9時半から手術が始まります。手術は1日2、3件程度あり、私は第1～第3助手として参加しています。手術の合間や帰宅後の時間を研究や論文執筆にあてています。手術は18時頃には終わり帰宅できますが、臓器移植が週に数回緊急で入るため、夜中や早朝、休日に出勤することもあります。

【日本の外科との違いについて】

最も驚いたのはその手術時間の短さです。私が日本で経験してきた肝臓手術の多くがこちらでは半分以下の時間で終わってしまいます。日本と比べて大胆な手技が多い印象はありますが、手術全体がシンプルで分かりやすく、もちろん術後成績も遜色ありません。また、世界一の臓器移植大国だけあり、移植外科医をとりまく環境とシステムの素晴らしさには感服します。研修医や医学生が簡単に臓器摘出・移植手術に参加し学べる体制が整っていることにも外科医として大きな衝撃を受けました。

【語学について】

渡航前から週1回のスペイン語レッスン、通勤時のラジオスペイン語会話などで勉強しましたが、あまり習得できた感じはありませんでした。渡航後にようやく生きたスペイン語に触れ、必要性に迫られて身についたように思います。現在日常会話には困りませんが、患者さんや職場のスタッフと専門的な会話をするのはまだ難しいと感じます。検討会の内容も6-7割程度は理解できますが、やはりスペイン語でディスカッションする域には達しておりません。手術中のやり取りは日本とさほど変わらないため、今のスペイン語力でも問題なく参加できています。分からないことは同僚に英語で確認しています。私は英語がすごく得意ではありませんが、スペ

イン人も英語に苦手意識を持つ人が多く、教え合いながら楽しく会話しています。

【家族の反応】

妻と２人の娘と共に家族で移住しました。子供たちは渡航後５カ月目に現地の学校に通い始めました。日本語しか話せない子供たちが環境に馴染めるのかをとても心配しましたが、幸い先生や友達に恵まれ、今は大きなストレスなく学校生活を送れているように思います。妻は日本での仕事を遠隔で継続しつつ、学校行事や地域の活動に参加しています。休日はムルシアの市街地まで家族で買い物に出かけたり、公園で子供達と遊んだりと、美しいムルシアの街並みと暖かい南スペインの気候を存分に楽しんでいます。家族との時間をとても大切にするスペインの文化の中で、私達家族の絆も深まったように感じます。

【現地でおきたトラブルや不自由なこと】

一番の不安は医療機関が簡単に受診できないことです。プライベートの医療保険に加入していますが、対象となる病院が自宅から遠い、スペイン語での電話予約が必要、受診してもスペイン語しか通じない、とハードルが高くなかなか受診できません。これまでも何度か病院受診が必要な場面がありましたが、医師仲間のネットワークを最大限に活かして切り抜けました。その他にも細かなトラブルや不自由はたくさんありますが、どれも家族で工夫しながら乗り越えることが日々の楽しみにつながっています。

【留学1年を迎えての感想】

あっという間の１年でした。ヨーロッパの先進的な医療機関で勉強する機会をいただき、手術件数、論文数ともに医師人生で最も多い１年となりました。外科医として、研究者として大変充実した日々を送っております。また、個々の多様性や仕事の喜びを重んじるスペイン人の働き方を目の当たりにして人生観が大きく変わったことを実感します。

最後になりましたが、本留学をご支援下さいました先進医薬研究振興財団に心より感謝申し上げます。大変貴重な機会をいただきありがとうございました。

〔原稿受領：2023 年 3 月〕

同僚外科医の結婚式にて肝臓チームのメンバーと（左から４番目が筆者）

海外留学だより

血液医学

「コロナ後」の海外研究留学
クリーブランドクリニック・ラーナー研究所からの一報告

川島　希
名古屋大学医学部附属病院 小児科
留学先：Department of Cancer Biology, Cleveland Clinic Lerner Research Institute, U.S.A.

公益財団法人先進医薬研究振興財団より、2021年度血液医学分野・海外研究助成を拝受しました、川島希と申します。海外留学を開始して一年経過しました。研究の途上ではございますが、現在までの研究成果および今後の展望ならびに研究生活以外についてご報告申し上げます。

2022年3月2日よりクリーブランドクリニック・ラーナー研究所腫瘍生物学分野SJコーリー研究室において、博士後研究員として研究を開始しました。もともと2021年12月に出国してその翌月から研究開始するつもりで準備していたところ、突如発症した網膜剥離症のため日本での加療を要したため当初予定より2か月遅れての研究開始となりました。急病のためとはいえ、突然の予定変更に対応していただき、回復を待っていただきました財団関係者にここに改めて深謝申し上げます。

留学を予定していた時期は、おりしも新型コロナウイルスのパンデミックが少し落ち着いて来るかと思われたところにオミクロン株が出現して世界的に感染拡大するところでした。いま留学しても研究活動が果たしてできるものだろうか、と今から思えば相当悩んでおりました。実際に意を決して出国するにあたり日本の空港はがらんどうで国際線機上も2023年3月現在では考えられないほど乗客はまばらでした。もう少し人通りは多かったのですが米国内でも当初は同様でした。しかし米国入国後すぐにあった一般教書演説で、バイデン大統領がマスクなしで登場したことに象徴されたように、すでに米国ではコロナ後を見据えた体制に変化しつつあり、顕著な物価高や円安の進行に悩ませられながらも、今日まで研究遂行の上で大きな障碍なくやって来れました。

クリーブランドクリニックといえばやはり循環器領域での臨床ならびに研究が著名だと思います。しかし私が所属していた名古屋大学小児科血液研究グループとは長年、造血不全・骨髄異形成症候群の分野で、クリーブランドクリニック・トランスレーショナル血液腫瘍研究分野長・マシュースキーと共同研究を行なっておりました。今回の留学先もそのご縁で決まりました。なお妻も同時にマシュースキー研究室で博士後研究員として研究を開始しました。

先天性骨髄不全症（Inherited bone marrow failure syndrome、IBMFS）の代表疾患であるシュワッハマン・ダイアモンド症候群（Shwachman-Diamond syndrome 、SDS）は好中球減少、膵外分泌不全、骨格異常を特徴とします。稀少小児疾患と言われるように、IBMFSは稀ですが、治療法が異なるため特発性再生不良性貧血との鑑別が必須となります。私は名古屋大学所属時には主にIBMFSの診断技術の開発に携わっていました。SDSでは成人後では白血病化が問題となります。本疾患では疾患特異的治療法は確立しておらず、白血病化した場合には造血細胞移植が行われますが、一旦、白血病化した場合にはたとえ移植したとしても予後が不良であることが知られております。このように一般的には小児期の疾患であると考えられているIBMFSでもSDSでは成人期にまで問題が及び、患者さんの医療ニーズは満たされていません。SDS原因遺伝子として*SBDS*が知られており、

SDS 全体の約 90% を占めますが、近年、複数の新規原因遺伝子が同定されてきました。私はその新規原因遺伝子のうち EFL1 に注目して研究を行なっております。IBMFS 原因遺伝子のノックアウトマウスは多くの場合、胎生致死となります。実際に、*Sbds*、*Efl1* のノックアウトマウスは胎生致死であると過去に報告があります。このように IBMFS ではマウス以外の動物モデルの確立が喫緊の課題ですが、小児血液・がん専門医でもあるコーリーの研究室では種々の小児遺伝性血液疾患の原因遺伝子のノックアウトゼブラフィッシュを確立して病態研究することに成功しています。そこで私は、今回 CRISPR/Cas9 を用いてノックアウトゼブラフィッシュ *efl1-/-* を新規樹立しました。マウスを用いた研究の経験はありましたが、ゼブラフィッシュを扱うのは初めてで、基本的な知識や手技を学ぶことから始める必要がありました。*efl1-/-* では孵化は正常ですが、受精後 15 日以降、有意に生存率が低下して 20 日までに死亡するが判明しました。SDS 病態を反映して、好中球減少、標準体長の低下、膵外分泌発生マーカー ela3l 発現低下が見られました。続いて、この病態に関連する異常シグナルを検討しました。全魚体では Eif6 蛋白の貯留を認め、*tp53* 下流の *cdkn1a*（p21）やアポトーシス関連分子の発現が亢進していました。以上より *efl1-/-* は SDS 形質を再現しており、リボソーム成熟因子のバランス不全による p21 活性化・アポトーシス関連シグナルの活性化が病態の一つであると考えられました。今後 RNA-seq、scRNA-seq などを用いて更なる病態機序の解析を行うとともに、ヒト細胞株、ヒト CD34 陽性細胞を用いて遺伝子編集、RNA 干渉による *EFL1* ノックアウト・ノックダウンを行い、ゼブラフィッシュモデルでの結果を相互補完する研究を行なっていく予定です。本研究成果を 2022 年米国血液学会で発表しました（doi: 10.1182/blood-2022-163748）。

こちらの研究室に来て印象深かったことは、学会発表や論文執筆もさることながら、プレリミナリーデータを用いて各種グラントに申請することがとても重視されることでした。獲得困難な NIH グラントから小児血液学の研修生対象の小規模なグラントまで種々あります。しかし大学院卒業から暫く経ち、日本で小児血液・がん臨床研修の全てを終えていた私にとって、こちらで応募できるグラントはそもそも少ないのです。この状況の中、先進医薬研究振興財団から留学助成の対象者に採択していただけたことは、直接的にこちらの研究室に所属できることとなった転機となっただけでなく、博士後研究員としての研究活動のベンチマークともなりました。助成終了後も、博士後研究員として引き続き同じ研究室で研究を継続できることとなったのは、助成をいただいたことが大きかったと思います。今もって感謝の念に堪えません。

最後に、研究以外の生活についても触れたいと思います。先に妻も同じくクリーブランドクリニックにおいて博士後研究員を始めたことを述べました。それと同時にこれまで家庭内でずっと過ごしていた第一子が生後 9 か月で初めて出国して海外の保育園（プレスクール）に通い始めるなど、私の家族みなにとってチャレンジングな日々が続きました。集団保育を始めた当初はありとあらゆる感染症を拾って来ましたが（幸い COVID-19 とはこれまで診断されたことはありませんが）、RS ウイルス細気管支炎に罹患した時には、呼吸困難のため小児救急に駆け込むなど、小児科医の私でも如何ともしがたい大変な時期もありました。家族 3 人とも一年かけてようやく生活に慣れてきたように思います。クリーブランドといえばかつては全米有数の都市、今では錆びついた工業地帯の代表的都市として悪名高いところかもしれませんが、一方ではプロ野球チーム・ガーディアンズ（旧インディアンズ）、ロックの殿堂、クリーブランド管弦楽団、全米でも有

数規模のプレイハウス、日本美術ではボストン美術館にも引けを取らないクリーブランド美術館などでも日本人にも知られていると思います。クリーブランドではあまり余暇を過ごすところがない、とはよく聞くところですが、スポーツ、芸術に音楽と、意外な穴場であるかもしれません。これまで毎日の生活に精一杯で、子どもが走り回れる場所もあるクリーブランド美術館以外にはあまりクリーブランドの「かつての栄光」に触れることができておりませんでしたが、今年から少しずつ研究以外の生活も充実できればと願っております。

以上のようなかけがえのない経験が可能となったのは、先進医薬研究振興財団より海外研究助成を拝受したことによります。ここに再び感謝の意を表して、本報告を終わりたいと思います。先進医薬研究振興財団のこれまでのご功績に敬意を表すとともに、益々のご繁栄を心よりお祈りいたします。

〔原稿受領：2023 年 3 月〕

未だ建造中だった量子コンピュータ IBM Quantum System One の前で第一子と。
クリーブランドクリニックと IBM とのパートナーシップに基づいた、ヘルスケア領域で初めての民間量子コンピュータで、2023 年 3 月 20 日に御披露目されました。

海外留学だより

Minneapolis Heart Institute Foundation 留学記

岡 田 厚
国立循環器病研究センター 心臓血管内科
留学先：Minneapolis Heart Institute Foundation, U.S.A.

この度、先進医薬研究振興財団より海外留学助成をいただき、2022年6月よりアメリカ合衆国ミネソタ州ミネアポリスにありますMinneapolis Heart Institute Foundationに研究留学をさせていただいております。今回、このような「海外留学だより」を執筆する機会をいただき、誠にありがとうございます。

私が留学に向けて具体的な準備を始めたのは、2020年2月のことでした。COVID-19パンデミックが始まる直前で、東京で開催されたPCR Tokyo Valvesという学会に来日されていたPaul Sorajja先生と直接お話できる機会があり、ようやく留学に向けて一歩踏み出せたと胸を撫で下ろしたことを今も覚えています。当時、COVID-19の流行は「対岸の火事」で終わるものだろうと思っておりました。しかし実際はそうはいかず、その翌月2020年3月の第84回日本循環器学会学術集会は直前に開催が延期（同年7-8月にオンライン開催）、2020年4月には一回目の緊急事態宣言が発出され海外渡航も制限となり、自分の描いていた計画がすべて見通しの立たない状況になってしましました。留学に行くということがどこか遠くに行ってしまったように感じておりました。日本でのワクチン接種が始まったタイミングで思い切って再度先方に打診をしたところから、ようやく具体的な相談を開始することが出来ました。

私は現在、Minneapolis Heart Institute FoundationのValve Science Centerというところに研究留学をさせていただいております。私は心臓弁膜症・心筋症を専門とする循環器内科医ですが、現在は心臓外科医であるVinayak (Vinnie) Bapat先生の元で主に研究の指導をいただいています。Bapat先生は心臓外科医でありながら、心臓弁膜症に対するカテーテル治療の第一人者でもあり、カテーテルインターベンションの世界で知られている「Valve in Valveアプリ」の発案者であります。私自身も現在、次なるアプリの作成に携わらせていただいています。内科医側の視点に制限されることなく、心臓外科手術を含めた広い視野から心臓弁膜症を考えられるようになったことも、このような留学の機会を与えていただいたおかげであると大変感謝しています。Minneapolis Heart Institute FoundationはAbbott Northwestern Hospitalという病院に隣接している財団で、臨床研究の推進・心臓病の疾患啓発・患者教育などをミッションに掲げ活動しています。臨床研究の推進という点では、Abbott Northwestern Hospitalや周辺医療機関と連携し、多くの臨床研究への患者登録が行われています。最新のカテーテル治療を非常に近くで勉強させていただくことが出来る環境にあり、つい先日はセンター長のPaul Sorajja先生が筆頭著者でTRILUMINATE試験の結果をNew England Journal of Medicine誌に報告され、世界レベルで進められている研究を直に感じることが出来ることは何物にも代えがたい経験であると感じています。心臓弁膜症に対するカテーテル治療が大きなパラダイムシフトを迎えている中で、多くの新しい治療デバイスに触れることが出来る機会も大変貴重であると感じています。

ミネアポリスはアメリカの中西部にあり、シカゴから約550km北西に位置しています。ミネアポリスとセントポールという2つの都市が隣接していて、合わせてTwin Cities（双子の都市）と呼ばれ

ています。メジャーリーグのミネソタ・ツインズのチーム名はこの呼称に由来しており、現在前田健太選手が所属しています。またアメリカを南北に縦断するミシシッピ川の上流に位置し、市内にはミシシッピ川唯一の滝があります。古くはこの滝を動力とした製粉業で栄えた町として知られていますが、現在は医療の街としても知られ、多くの医療機器メーカーや開発企業の拠点が置かれています。

私が渡米した2022年5月末には、日本ではまだマスク着用が必須であった一方、アメリカではOptionalとなっていたため、渡米する機内で「飛行機のドアが閉まるまではマスク着用」を指示されるという不思議な経験をしました。つい先日、Abbott Northwestern Hospitalでは病院内でもマスクは不要となり、一足早くコロナ前の日常が戻っています。残りの留学期間も実りある時間にできますよう、精進していきたいと考えています。最後に、このような海外留学に助成いただきました先進医薬研究振興財団の先生方に、改めまして御礼申し上げます。

〔原稿受領：2023年5月〕

Minneapolis Heart Institute Foundation team picture
（American Heart Monthに行われたWear Red Day
最後列・左から4番目が筆者）

海外留学だより

循 環 医 学

英国オックスフォード大学への研究留学

藤 原 健 史
自治医科大学 内科学講座 循環器内科学部門
留学先：Nuffield Department of Primary Care Health Sciences, University of Oxford, U.K.

この度は、先進医薬研究振興財団より海外留学助成をいただき、海外留学ができましたことに対して、心より感謝申し上げます。

2022年4月より英国オックスフォード大学のNuffield Department of Primary Care Health Sciences（NDPCHS）で研究生活を開始しました藤原健史と申します。私のベースは循環器内科医であり、留学に至るまでの経緯と現在の活動、そしてオックスフォードでの生活に関して述べさせていただきます。

私は、自治医科大学の卒業であり、卒後臨床研修終了後に高知県で3年間、その後群馬県で4年間地域医療に従事しました。その過程で、高血圧を始めとした生活習慣病を診るケースが非常に多く、高血圧の病態や管理に興味を持つようになり、母校の循環器内科学講座のサポートの元で、臨床研究を開始しました。9年間の義務年限終了と同時に母校に戻り、循環器内科医として、臨床業務と高血圧に関する臨床研究を並行して行ってきました。そして、40歳目前で海外留学する機会を得ることができ、現在に至っております。

地域医療での血圧管理において、測定された家庭血圧がクラウド上のサーバーに自動転送され、診療所の端末からその血圧レベルを確認できる、いわゆる「Information Communication Technology（ICT）機能を用いた血圧管理」の有用性を実感する機会がありました。全世界におけるCOVID19感染症の大流行を経て、医療のICT化/デジタル化は一気に加速し、今でこそオンライン診療やアプリを用いた生活習慣病管理は珍しいことではなくなりましたが、私がICT機能を用いた血圧管理に興味を持ち始めた頃は、研究レベルで活用されることはあっても、日常臨床での活用はほぼ皆無の状況でありました。一方、海外からはデジタル機能を用いた血圧管理の有用性を示唆する論文が散見されていたため、私は海外留学を通じて、ICT技術を用いた血圧管理の有用性を学ぶ目的で、海外留学を決意しました。

私が現在在籍しているオックスフォード大学に留学しようと考えた理由は、1）高血圧患者に対するデジタル血圧管理の有用性を示したランダム化比較試験を多く行っているRichard McManus先生がいること、2）出身大学が単科であったため、見識を広めるために、総合大学で学びたかったこと、が挙げられます。Richard McManus先生に直接留学希望のメールを送り、その後、web面談を行い、私の研究内容や留学中に行いたい研究などの意見交換を行いました。そして、何よりも貴財団より助成をいただくことが決定して、オックスフォード大学への2年間の留学が決まりました。留学が決定した頃は、日本でもCOVID19感染症の波があり、また、出発の1ヶ月前にロシア侵攻が始まったことで、渡英できるか大きな不安がありましたが、当初の予定通り、無事に渡英できました。

オックスフォード大学は、11世紀末に創立した英語圏では世界最古の大学です。38のカレッジで構成されておりますが、私が在籍しているNDPCHSは、それらのカレッジからは独立した研究機関であり、私はRadcliff Primary Care Buildingという施設で研究活動を行っております。ウェットラボではなく、ほぼデスクとPC端末、ミーティングルームのみで構成された建物です。

Radcliff Primary Care Building には、私が在籍しております Hypertension team の他にも、デジタルヘルス、感染症、医療経済学、データサイエンスなど多くの部門があり、各分野の専門家に意見を伺ったり、質問できたりと、研究のためには最高の環境が整っております。毎週火曜日と金曜日には NDPCHS 全体のコーヒーブレイクがあり、所属するチームの垣根を超えて、研究の話をしたり、雑談をしたりできます。大学の特性上、とても国際色豊かなスタッフで構成され、また皆とてもフレンドリーです。私が在籍している Hypertension team は医師、臨床研究看護（Clinical Research Nursing）、助産師、薬剤師、医療統計学者、エンジニア、大学院生など多様なメンバーで構成されており、総勢で 50 名近く在籍しております。多くの臨床研究が同時進行しておりますが、主に私は 1）実臨床下での高血圧患者に対する家庭血圧デジタル介入の有用性を検証する観察研究、2）英国の電子カルテベースのデータセットである Clinical Practice Research Datalink を用いて、降圧療法のメリットとデメリットを検証する研究、3）日英の混合データを用いて、両国の高血圧患者の血圧管理状況や臨床特性を比較する研究、に従事しております。多くのスタッフのサポートの元で研究活動を行うことができることに日々感謝しております。

ここからは、オックスフォードついて触れていきます。オックスフォードはロンドンの北西に位置し、ロンドンの中心部から直行バスで約 1.5 時間、ヒースロー空港からも直通バスがあり約 1.5 時間の距離であり、24 時間アクセス可能ですので、交通の便がとてもよいです。「大学の中に街がある」と表現されるように、街の中心部にカレッジや大学関連施設が多く散在する大学都市です。歴史的建造物が多く立ち並び、また非常に自然が豊かな街ですので日常目にする光景が絵画のように美しく、特に春から初夏にかけては草花や木々が芽吹き、まさに息を呑む美しさです。治安も良く、夜間に女性が一人で街を歩いても、危険に曝されることはありません。問題点としては、賃貸物件が少ない上に、家賃がロンドン並に高いことです。さらに、もともと英国は日本と比較すると物価が高いですが、現在はロシア侵攻などの影響でインフレが進み、私が渡英した 1 年前と比較すると、すべての物が 1-2 割り程度価格上昇しています。特に電気代の高騰が顕著であり、日本の約 2-3 倍の印象です。また、オックスフォードの一つの特徴として、歴史あるパブが数多くあることが挙げられ、私もときどきパブでエールビールを飲みながらサッカー観戦することが一つの楽しみになっています。物価高であることを除けば、かなり住みやすい都市であると思います。

本稿を執筆している時点で、留学生活も残り 1 年となりました。日本では絶対にできない貴重な経験を多く積むことができ、研究活動だけでなく、人間として成長できたと思います。このような素晴らしい機会をくださいました貴財団に改めて御礼を申し上げるとともに、将来より多くの日本人研究者が世界へ羽ばたくようになることを願っております。

〔原稿受領：2023 年 5 月〕

Radcliffe Primary Care Building の前で

財　団　概　要

1．沿　革

本財団は、昭和 43 年 12 月に吉富製薬株式会社の寄付を受けて、“ 精神神経科領域における臨床薬理学及び薬物治療学の研究（精神薬療研究）の推進 ” を目的として「財団法人 精神神経系薬物治療研究基金」として設立されました。

その後、昭和 57 年 2 月に株式会社ミドリ十字の寄付によって “ 血液成分その他の高分子蛋白の医学分野における研究（血液医学研究）の振興 ” を目的として設立された「財団法人 内藤医学研究振興財団」を統合し、平成 11 年 4 月から「財団法人 精神神経・血液 医薬研究振興財団」として財団活動を継承しました。

平成 14 年 3 月に、新たに “ 循環障害に起因する諸疾患に関する研究（循環医学研究）の振興 ” を目的に追加するとともに、名称を「財団法人 先進医薬研究振興財団」に変更しました。

平成 23 年 4 月には、内閣総理大臣より公益認定を受け、「公益財団法人」として活動しております。

2．目　的

本財団は、精神神経科領域における臨床薬理学及び薬物治療学の研究（精神薬療研究）と血液成分その他の高分子蛋白の医学分野における研究（血液医学研究）並びに循環障害に起因する諸疾患に関する研究（循環医学研究）に対する助成、顕彰等を行ない、医学及び薬学に関する先進的な研究の振興を図り、もって国民の医療と保健に貢献することを目的としております。

3．事　業

本財団の事業は、財団の目的に沿う研究に対する助成事業、研究報告会、市民公開講座、フォーラム、刊行物等で、その主な概要は次のとおりであります。

1）助成事業

（1）一般研究助成

わが国の精神薬療、血液医学並びに循環医学の研究振興を目的として、独創的で医療ニーズの高い研究に研究助成金を交付するものです。

（2）若手研究者助成

わが国の精神薬療、血液医学並びに循環医学の研究分野における若手研究者（応募時 39 歳以下）の育成を目的として、新規で将来性のある研究に研究助成金を交付するものです。

（3）先進研究助成

疾病の治療、診断あるいは予防に対する直接的な貢献が期待される先進的、かつ臨床上有用性の高いテーマに研究助成金を交付するものです。

（4）海外留学助成

わが国の精神薬療、血液医学並びに循環医学の研究分野における国際的視野に富む人材の育成を目的として、若手研究者（応募時 39 歳以下）に助成金を交付するものです。

（5）被災地支援研究助成

東日本大震災で被災された地域（岩手・宮城・福島など）における精神薬療分野、血液医学分野、循環医学分野に関わる災害医療をテーマにした調査・研究に助成し、医学・薬学に関する先進的な研究の振興を図る目的で平成 23 年度及び平成 24 年度に助成を行いました。

（6）COVID-19 関連研究助成

世界的に猛威を振るっている COVID-19 の研究振興を図り、国民の医療と保健に貢献すべく、COVID-19 関連研究助成枠を設けて、令和 2 年度に特別研究助成を行いました。令和 3 年度及び令和 4 年度には、各分野の一般研究助成として追加で実施しました。

2）先進医薬研究報告会

若手研究者助成研究成果と先進研究助成成果の発表、若手研究者の最優秀表彰及び海外留学助成贈呈式などを目的に、毎年 12 月上旬に報告会を開催しております。

3）市民公開講座

・テーマ：認知症の予防と介護　　平成 21 年 2 月 21 日開催
・テーマ：人生 100 年時代の生き方、自身の医療・ケアを考える　　令和　2 年 2 月 15 日開催

4）フォーラム

財団の事業として、不定期にフォーラムを開催しております。

先進医薬フォーラム

・テーマ：血管障害からみた脳と心臓　　平成 16 年 2 月　7 日開催
・テーマ：微小循環と脳機能障害のリンケージ　　平成 17 年 2 月 26 日開催
・テーマ：時間軸からみた脳血管障害の予防と治療　　平成 18 年 1 月 28 日開催

先進医薬研究振興財団発足 10 周年記念式典

・永年功労者表彰式
・贈呈式
・特別講演
：歴史と冒険のシンクロニシティー　－遣唐使をめぐって－
演者　辻原　　登　先生（芥川賞作家）
：宇宙の創生と新たに生じた謎
演者　佐藤　勝彦　先生（自然科学研究機構長、東京大学名誉教授）

平成 25 年 3 月 2 日開催

5）刊行物

（1）先進医薬年報

毎年 8 月に、当財団の 1 年間の活動などをまとめて機関誌として発行しております。

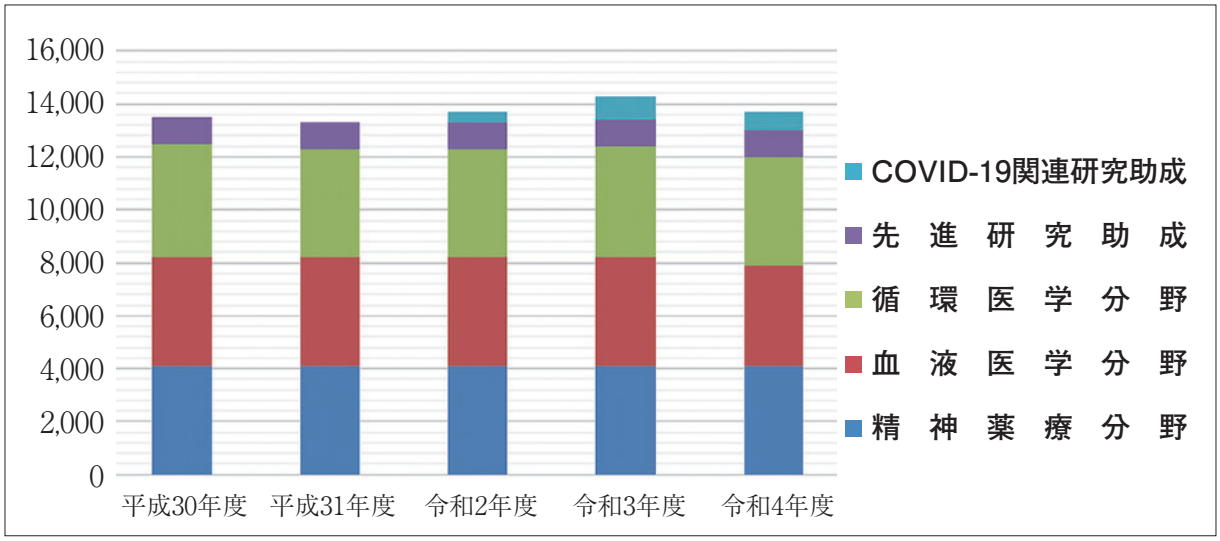
（2）研究成果報告集

毎年 3 月に、精神薬療研究成果報告書、血液医学研究成果報告書、循環医学研究成果報告書並びに先進研究助成研究成果報告書をまとめて研究成果報告集として発行しております。

４．助成金額の推移

財財団設立以来の助成金交付累積額は 36 億 9,885 万円、交付件数は 4,042 件となります。

最近５年間の助成金の推移（単位：万円）



５．プロフィール

設立年月日　：　昭和 43 年 12 月 12 日
基本財産　：　10 億円（令和 5 年 3 月 31 日 現在）
行政庁　：　内閣府
公益財団法人
　認定日　：　平成 23 年 3 月 29 日
　登記日　：　平成 23 年 4 月 1 日
主たる出捐者　：　田辺三菱製薬株式会社

6．役員、評議員、名誉理事、選考委員 【五十音順】

（2023 年 7 月 1 日現在）

1）役　　員

理 事 長	林　　義 治	田辺三菱製薬株式会社
常務理事	大 瀧 芽久美	田辺三菱製薬株式会社
	阿 部 康 二	国立精神･神経医療研究センター病院 院長
	小 川 久 雄	熊本大学 学長
	尾 崎 紀 夫	名古屋大学大学院医学系研究科 特任教授
	尾 﨑 由基男	(医)協友会 笛吹中央病院附属 おひさま在宅クリニック院長、 山梨大学 名誉教授
	金 倉　　譲	(一財)住友病院 院長、大阪大学 名誉教授
	久 住 一 郎	北海道大学大学院医学研究院 教授
	小 室 一 成	(学)国際医療福祉大学 副学長
	武 田 雅 俊	(学)河﨑学園 大阪河﨑リハビリテーション大学 学長、 (一財)仁明会 精神衛生研究所 所長、大阪大学 名誉教授
	中 込 和 幸	国立精神･神経医療研究センター 理事長･総長
	西 川 伸 一	京都大学 名誉教授
	原　　寿 郎	(地独)福岡市立病院機構 理事長
	峰 松 一 夫	(医)医誠会本部 常務理事(臨床顧問)、医誠会病院 城東中央病院統括病院長、国立循環器病研究センター 名誉院長、(公社)日本脳卒中協会 理事長
監　　事	中来田 真 康	中来田真康税理士事務所 所長
	髙 田 里 美	三菱ケミカルグループ株式会社

2）評 議 員

安 斉 俊 久	北海道大学大学院医学研究院 教授
北 園 孝 成	九州大学大学院医学研究院 教授
嶋　　緑 倫	奈良県立医科大学 副学長･医学部長、 血栓止血センター センター長
白 川　　治	(医)尚生会 湊川病院、神戸大学 客員教授
高 柳　　広	東京大学大学院医学系研究科 教授
竹 田　　潔	大阪大学大学院医学系研究科 教授、 大阪大学免疫学フロンティア研究センター 拠点長
西 川　　徹	(学)昭和大学医学部 客員教授、京都府立医科大学 客員教授、東京医科歯科大学 名誉教授
前 村 浩 二	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 教授

山　脇　成　人	広島大学 脳･こころ･感性科学研究センター 特任教授･センター長、国際アフェクトーム（感情）研究センター センター長
嘉祥寺　泰　明	三菱ケミカルグループ株式会社
園　田　龍太郎	田辺三菱製薬株式会社
谷　口　弘　之	田辺三菱製薬株式会社

3）名誉理事

浅　野　孝　雄	池　田　康　夫	笠　原　　嘉
加　藤　進　昌	黒　田　重　利	小　山　　司
齋　藤　英　彦	佐　藤　光　源	猿　田　享　男
島　本　和　明	鈴　木　宏　治	樋　口　輝　彦
堀　　正　二	幕　内　雅　敏	松　下　正　明
松　本　慶　蔵	三　國　雅　彦	吉　岡　　章

4）選考委員

精神薬療選考委員会

加　藤　忠　史	順天堂大学大学院医学研究科 主任教授
金　沢　徹　文	大阪医科薬科大学医学部 主任教授
鈴　木　健　文	山梨大学医学部 教授
髙　橋　英　彦	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 主任教授
富　田　博　秋	東北大学大学院医学系研究科 教授、東北大学病院 科長、東北大学災害科学国際研究所 教授
中　村　雅　之	鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 教授
橋　本　　衛	近畿大学医学部 主任教授
菱　本　明　豊	神戸大学大学院医学研究科 教授
沼　田　周　助	徳島大学大学院医歯薬学研究部 教授
山　末　英　典	浜松医科大学医学部 教授

血液医学選考委員会

天　谷　雅　行	慶應義塾大学医学部 教授、慶應義塾 常任理事、理化学研究所生命医科学研究センター チームリーダー（非常勤）
井　上　克　枝	山梨大学大学院総合研究部医学域 教授、山梨大学医学部附属病院 部長
井　上　治　久	京都大学iPS細胞研究所 教授、理化学研究所バイオリソースセンター チームリーダー、理化学研究所革新知能統合研究センター 客員主管研究員

大　賀　正　一	九州大学大学院医学研究院 教授
岡　崎　　拓	東京大学定量生命科学研究所 教授
清　井　　仁	名古屋大学大学院医学系研究科 教授
清　野　研一郎	北海道大学遺伝子病制御研究所 教授
松　本　雅　則	奈良県立医科大学 教授･部長
三　宅　幸　子	順天堂大学大学院医学研究科 教授
宮　崎　泰　司	長崎大学原爆後障害医療研究所 教授

循環医学選考委員会

井　口　保　之	東京慈恵会医科大学 講座担当教授
伊　藤　義　彰	大阪公立大学大学院医学研究科 教授
黒　田　　敏	富山大学学術研究部医学系 教授
小　林　欣　夫	千葉大学大学院医学研究院 教授
坂　田　泰　史	大阪大学大学院医学系研究科 教授
佐　田　政　隆	徳島大学大学院医歯薬学研究部 教授
塩　島　一　朗	関西医科大学 教授
竹　石　恭　知	福島県立医科大学附属病院 病院長
西　山　和　利	北里大学医学部 主任教授
三　國　信　啓	札幌医科大学 教授

先進研究選考委員会

天　谷　雅　行	慶應義塾大学医学部 教授、慶應義塾 常任理事、 理化学研究所生命医科学研究センター チームリーダー（非常勤）
井　上　克　枝	山梨大学大学院総合研究部医学域 教授、 山梨大学医学部附属病院 部長
井　上　治　久	京都大学iPS細胞研究所 教授、理化学研究所バイオリソースセンター チームリーダー、理化学研究所革新知能統合研究センター 客員主管研究員
大　賀　正　一	九州大学大学院医学研究院 教授
岡　崎　　拓	東京大学定量生命科学研究所 教授
清　井　　仁	名古屋大学大学院医学系研究科 教授
清　野　研一郎	北海道大学遺伝子病制御研究所 教授
松　本　雅　則	奈良県立医科大学 教授･部長

三　宅　幸　子　　順天堂大学大学院医学研究科 教授
宮　﨑　泰　司　　長崎大学原爆後障害医療研究所 教授

7．役員、評議員、選考委員の異動【五十音順】

1）新　任

理　　事　　（2023年6月 2日付）

小　川　久　雄	尾　崎　紀　夫	尾　﨑　由基男
金　倉　　譲	久　住　一　郎	小　室　一　成
中　込　和　幸		

監　　事　　（2023年6月 2日付）

中来田　真　康

評　議　員　　（2023年6月 2日付）

安　斉　俊　久	北　園　孝　成	嶋　　綠　倫
高　柳　　広	竹　田　　潔	前　村　浩　二

選考委員　精神薬療選考委員会　　（2023年4月 1日付）

髙　橋　英　彦	中　村　雅　之	沼　田　周　助
橋　本　　衛	菱　本　明　豊	山　末　英　典

血液医学選考委員会　　（2023年4月 1日付）

天　谷　雅　行	井　上　克　枝	井　上　治　久
岡　崎　　拓	三　宅　幸　子	

循環医学選考委員会　　（2023年4月 1日付）

小　林　欣　夫	坂　田　泰　史	佐　田　政　隆
西　山　和　利	三　國　信　啓	

2）退　任

理　　事　　（2023年6月 2日付）

加　藤　進　昌	小　山　　司	島　本　和　明
鈴　木　宏　治	幕　内　雅　敏	三　國　雅　彦

監　　事　　（2023年6月 2日付）

濱　田　宇　一

評　議　員　　（2023年6月 2日付）

尾　崎　紀　夫	尾　﨑　由基男	金　倉　　譲
小　林　祥　泰	小　室　一　成	坂　田　洋　一
山　田　和　雄		

選　考　委　員　　精神薬療選考委員会　　（2023年3月31日付）

池　田　　学	井　上　　猛	上　野　修　一
須　田　史　朗	吉　村　玲　児	鷲　塚　伸　介

血液医学選考委員会　　（2023年3月31日付）

浅　田　祐士郎	椛　島　健　治	高　柳　　広
竹　田　　潔	西中村　隆　一	

循環医学選考委員会　　（2023年3月31日付）

安　斉　俊　久	卜　部　貴　夫	髙　橋　　淳
前　村　浩　二	南　野　　徹	

退任されました方々には、長年に亘る財団活動へのご尽力に深謝いたします。

事　務　局

事　務　局　長	堀　　雄一郎
事務局長補佐	大　谷　　渡
事　務　局　員	大　橋　良　孝
事　務　局　員	山　本　邦　子

賛 助 会 員

本財団の事業趣旨にご賛同をいただき、2023 年 3 月 31 日現在で次の方々にご入会いただいております。
皆様方のご理解と温かいご支援に厚くお礼申しあげます。

【団　体】（敬称略、順不同）

三菱ケミカルエンジニアリング株式会社　　田辺三菱製薬工場株式会社
吉富薬品株式会社

【個　人】（敬称略、順不同）

中川幸光　　冨修　　桐原靖　　上嶋孝博
堀雄一郎

― 賛助会員ご入会のお願い ―

本財団は、出捐会社＜田辺三菱製薬㈱＞の歴史と共に歩み、現在では精神薬療、血液医学、循環医学の３研究分野における優秀な研究に対する各種助成等を行うことによって、医学及び薬学に関する研究の振興を図り、もって国民の医療と保健に貢献することを目的としております。

本財団活動の目的にご賛同いただける方は、常時募集しておりますので、賛助会員としてご入会くださいますようお願い申し上げます。

なお、会員の皆様から寄せられました賛助会費は、財団活動のため有効に活用させていただきます。

― ご入会にあたって ―

1）入会は随時受付しております。
財団ホームページの入力フォームにてお申込みください。

2）会費（年額１口以上）
・団体会員：年額１口２万円
・個人会員：年額１口２千円

3）振込先
大変恐縮ですが振込手数料はご負担くださいますようお願い申し上げます。
・銀行名：三菱 UFJ 銀行 大阪中央支店
・口座番号：（普通）0102451
・フリガナ：ザイ）センシンイヤクケンキュウシンコウザイダン
・口座名義：公益財団法人 先進医薬研究振興財団

4）賛助会員は「機関誌」をご送付させていただきます。

5）本財団は内閣府より「公益法人」の認定を受けておりますので、税制上の優遇措置を適用できます。

【優遇措置の概略】
・個人：支出した寄附金（その年の総所得金額の 40％を限度とする）の内、２千円を超える部分について寄付金控除が認められます。
・法人：寄附金は、通常一般の寄附金の損金算入限度額まで別枠で損金算入できます。

ご不明なことがございましたら、下記財団事務局までお問合せください。

公益財団法人　先進医薬研究振興財団
電　話：06-6224-0607　Fax : 06-7657-8332
E-mail ：m- research@cc.mt-pharma.co.jp
ＵＲＬ：https//www.smrf.or.jp

編 集 後 記

いつも財団活動にご理解とご協力を頂き、大変感謝しております。またお忙しい処、本号にご寄稿頂きました先生方に厚く御礼申し上げます。

COVID-19の流行も3年になります。その間ワクチンや治療薬においては開発データの迅速承認など、大きな変革をもたらしました。そのお蔭でCOVID-19は、日本ではインフルエンザと同等の5類に分類され、再び自治体等の旅行支援も開始されました。昨年は財団の各種会議及び研究報告会は、ほぼWEB開催とさせて頂きましたが、2023年度からは会場出席を原則として運営させて頂こうと財団事務局メンバー一同張り切っております。今やWEB会議を使いこなし業務を推進することに支障は有りませんが、やはりFace to Faceの会義では、お互いの表情を見ながらの会話のキャッチボールに気分も高揚し、WEBの数倍の効果をもたらすと感じます。

歴史でスペイン風邪の流行を学びましたが、実際にCOVID-19の猛威を経験し乗り越えた今、100年後に歴史で学ぶ未来の子孫に「起きた事象と社会システムの変化、医療の進化」がどのように伝わるのか楽しみです。一方で私達が本当に伝えたい「人類は必ず乗り越えられる」という勇気を持って貰えたらと切に願っております。

企業で仕事をしている時は「10年先を見て今を考える」を心掛けていましたが、公益財団の助成は「今の先生方の研究を後押しすること」で、日本国民の健康維持や最適な治療の根幹に関わる100年先の日本を支える事業として、少しでもお役に立てるよう尽力していまいります。

最後になりますが、この6月で10名の評議員、理事、監事の先生方がご退任されました。長きに渡り当財団の活動にご尽力頂きましたこと、心より御礼申し上げます。先生方の更なるご活躍を祈念いたしております。

（2023年7月　常務理事　大瀧　芽久美）

公益財団法人 先進医薬研究振興財団
先進医薬年報　No.24

発 行 所　公益財団法人 先進医薬研究振興財団
〒541-8505　大阪市中央区道修町三丁目2番10号
SENSHIN Medical Research Foundation
3-2-10, Dosho-machi, Chuo-ku, Osaka 541-8505, Japan
TEL：06-6224-0607　Fax：06-7657-8332
E-mail：m-research@cc.mt-pharma.co.jp
URL : https://www.smrf.or.jp

発 行 人　林　義 治

編 集 人　大 瀧 芽久美

発 行 日　2023年8月20日

印 刷 所　株式会社 あさひ印刷
〒710-0826　岡山県倉敷市老松町2－8－24
TEL：086-422-2900　Fax：086-422-2901

ACTIVITY REPOET

No. 24 for the Advanced Medicine

August 2023

SENSHIN Medical Research Foundation